

〈翻訳〉

メランヒトン『神学要覧』（1559年）－その1－
(Loci praecipui theologici. 1559) 翻訳

菱刈 晃夫

メランヒトンの『神学要覧』（あるいは総覧、通称ロキ）は、プロテスタント・ルター派神学最初の教義学書として、1521年に初版が *Loci communes rerum theologicarum seu Hypotyposes theologiae* として出版された。ロキ (loci) とは第一義的にロクス (locus), すなわち場所や位置 (英語の location) を意味し、そこから転じて事柄の主題もしくはトピックを指すようになる。つまり、ルター派神学の重要な主題 (トピック・ポイント・要点) を扱った書物というほどの意味。初版のタイトルは「神学の共通主題の要点あるいは神学の主題」とでも訳しうるが、やはり同じく神学の重要主題を纏めた教義学書という点では変わらない。よく知られるように、この内容と出来栄を、ルターは常に絶賛していた。

聖書のみ (sola Biblia), 信仰のみ (sola fide), キリストのみ (solus Christus), 恩恵のみ (sola gratia) の四原理を柱とするルターの宗教改革神学は、メランヒトンという体系家を待って、ようやくその内容に適切な形式を与えられたとあってよい。ルター自身は決して体系家や組織家ではない。彼は、そのあり余る情熱と信仰によって、宗教改革という巨大な炎を点火した。が、その後の教会制度や教育制度等の現実的かつ具体的な整備・建設に当たっては、メランヒトンによる体系家もしくは組織家としての才能と尽力がなければ、今日に見るようなプロテスタント教会 (教界) は誕生してはいなかった。「ドイツの教師」として名高いメランヒトンではあるが、その業績は、本国ドイツではもちろん、ましてや日本においては未だ正統に評価されているとはいえない。それは、初版のロキの邦訳はあるものの、メランヒトン晩年のこのロキの邦訳がないことを見ても明らかである。

よって、メランヒトン思想の集大成であり、かつ主著ともいえるこの最終版ロキのラテン語原典からの初の邦訳出版を、4年後2017年の宗教改革500周年をめぐって実現させるべく、昨年 (2012年) 半ばより作業開始した。底本としては、Corpus Reformatorum に基づくシュトゥッペリッヒによる選集を用いた。なお、英訳本

(Translated by J. O. Preus, The Chief Theological Topics : LOCI PRAECIPUI THEOLOGICI 1559, Second English Edition, Saint Louis, 2011.) も適宜参照したが、よくあるごとく、メランヒトンのラテン語テキストは極めて明晰で美しいが、英訳においては多少意識されている箇所もある。さて、とはいうもののシュトゥッペリッヒ版(Werke in Auswahl : Robert Stupperich (Hg.) Bd.2, T.1 u. Bd.3, T.2. Gütersloh, 1978; 1980. 以下 SA と略記の後頁を示す)でも 800 頁を超すこの大作のラテン語原典からの邦訳は至難の技ではあるが、努力していきたい。全体で 24 ある主題の内、今回は、序文の次に、創造について、罪の原因と偶然性について、人間の力あるいは選択の自由〔自由意志〕について、の三つの主題箇所の「試訳」を掲載した。

メランヒトン教育思想の源泉が、ここにもっとも完成された形で収められている。ロキについてのより詳しい解説については、紙幅の関係から稿を改めるとし、上記した経緯については、差し当たり以下を参照されよ。とくにユングの最新の伝記を参照されたい。

マルティン・H・ユング『メランヒトンとその時代ードイツの教師の生涯ー』菱刈晃夫訳、知泉書館、2012 年。原著 : Martin H. Jung : Philipp Melanchthon und seine Zeit, Göttingen, 2010. (これは日本で約 40 年ぶりの最新の伝記かつ研究入門書。)

日本ルター学会編訳『宗教改革者の群像』知泉書館、2011 年所収、ハインツ・シャイブレ著、菱刈晃夫訳「フィリップ・メランヒトン」。

菱刈晃夫『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』溪水社、2001 年。

菱刈晃夫『近代教育思想の源流ースピリチュアリティと教育ー』成文堂、2005 年。

菱刈晃夫『からだで感じるモラリティー情念の教育思想史ー』成文堂、2011 年。

* * *

フィリップ・メランヒトンによって纏められた神学の論題 序文 (SA Bd.1. 189-194.)

人間は、数と秩序を理解するように神によって造られています。そして、学習にお

いては数と秩序の両方から多く助けられます。それゆえ、教えられる術 (in artibus tradendis) においては、独自の配慮によって部分の秩序が明らかにされ、導入、進歩、そして終点が示されるべきです。このように説明する形式を、哲学では組織的方法 (Methodus) と呼びますが、しかし、証明によって積み上げられるような学問においてこの方法は採用されても、教会の教えにおいては採用されません。というのも、証明による方法は、感覚に属している事柄から、さらに原理と呼ばれるものの最初の理解から、展開するからです。教会の教えという場合には、秩序だけが探究されるのであり、そのような証明の方法ではありません。なぜなら、教会の教えは証明から得られるのではなく、神による確実に明瞭な証言 (testimonium) によって、すべての人間に伝えられた事柄を語ることから得られるからです。神は、その無限の好意 (bonitas) を通じて自身およびその意志を明らかにしました。

さらに、哲学においては確実なものが探究され、不確実なものが区別されます。確実であることの理由は、普遍的な経験、原理、そして証明にあるのと同じように、教会の教えにおいて確実であることの理由は、神による啓示 (revelatio) にあります。とはいえ、神から与えられたことの意味がどのようなことなのか、わたしたちは熟考しなければなりません。ちょうど健康な人にとっては、 $4 \times 2 = 8$ であることの意味は確かです。なぜなら、原理に基づく自然の知識だからです。同じように、わたしたちには確かな揺るぎない信仰箇条があります。聖なる威嚇と約束です。同じように、改悛をした者には神の子によって罪が許され、それが聞き取られ、永遠の命を継承する者にされることも確かです。しかし、確実であることの理由は異なります。数に関する意味を精神は自身の判断によって見出します。それに対して、信仰箇条は啓示によって確実となります。これは確実で明確な、ちょうど死者の復活や多くの他の奇跡のような、神による証言によって確証されます。しかし、こうした事柄は人間の精神に備わる判断を超えているので、たとえ精神がそうした証言や奇跡によって動かされ、聖霊によって賛同することへと助けられるにせよ、やはり賛同するには、まだ脆弱です。

しかし、たとえもし哲学が、感覚によって確かめられていないとか、原理や証明によっても確証されていない事柄については疑うべきであると教えるにせよ、たとえここでは雲の原因がくぼみだけにあるのかとか、なぜ虹は弧を描くのかということは疑ったり判断を保留したりすること (ἐπέχειν) は許されるにせよ、それにもかかわらず、神によって与えられた教会の教えは確かであり、揺るぎないものであることをわたしたちは知る

のです。たとえもし感覚によっても把握されず、原理のようにわたしたちに生まれついてもおらず、証明によって探究されないにしても、しかし、確実であることの理由は神による啓示であり、それは真実を語っているのです。

それゆえに、そうした哲学による疑いあるいは検査(ἐποχήν)を神から与えられた教会の教えに適用することを、わたしたちは決して許しません。さらに、精神においてはこの人間の自然の本性における墮落によって、神に関する疑いという混乱は大きなままに止まっています。それにわたしたちは抵抗し、これと神から与えられた考えを対置しなければなりません。それを増大させたり、疑いを賞賛したりしてはなりません。そうではなく、信仰が確かな賛同であり、反証の論拠(ἐλεγχος)なのです。つまり、聖なる証言によって打ち負かされた精神が、見えない事柄についての聖なる声を把握することは確実なことなのであって、ヘブライ人への手紙に語られている通りです⁽¹⁾。

このことを前置きして始めなければなりません。つまり、わたしたちは教会において教えられた事柄が確かであり、堅固であり、揺るぎないものであることを認識するところから始めます。神の子が、こういわれた通りです。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」⁽²⁾。そして、さらに次のことも認識すべきです。つまり、信仰は堅固な賛同であり、福音の教えのすべてを受け入れることです。アルケシラオスの学徒において⁽³⁾、ちょうど多くの厚顔無恥な気質の者や多くの傲慢な人間が常に判断したし、判断するし、これから判断するであろうような、曖昧な遊びや意見や討論ではありません。こうした冒涇を、神は現在そして永遠の極刑によって罰します。

さて、教えを構成する秩序について少し前置きしておかなければなりません。預言および使徒の書そのものは最高の秩序をもって記されていますし、信仰箇条をもっとも理解できる秩序において伝えています。すなわち、預言書と使徒書には歴史的な系列があります。最初のものから創造から教会の設立まで整えられています。さらに、この預言書には事物の創造からキューロスの君主制に至るまでのすべての時間の系列が含まれています。この系列のなかで教会の多くの修復が語られ、それによって律法の教えと福音の約束が散りばめられています。次いで、使徒たちはキリストを示し、その誕生、十字架、復活についての証人です。これが歴史です。そして、キリストが語るなかに信仰箇条、律法と福音の説明が含まれるのです。そして、さらにパウロの議論が加わります。彼は大家としてローマ人への手紙のなかで、律法と福音の区別、罪、それによって永遠の命へと復活させられるところの恩恵もしくは回復についての議論を展開しています。

とはいっても、しかし、こうした秩序について気づいている人には注釈やわたしたちの書物といったものはあまり必要ではありませんが、それでも神は、エフェソの信徒への手紙4章で福音の務めについて語っているように⁽⁴⁾、教会のなかで教師の声が響き渡るのを欲しているのですから、教師の仕事は空しいものと受け取られることはありません。セムやヤフェトといった父祖とは違ったことをヘシオドスが伝えたように、わたしたちが何か新しい事柄や物事を産み出すわけではありません。異教徒が使徒たちから伝えられなかったことから新しい事柄を捏造するわけでもありません。しかし、敬虔な注釈者は預言や使徒が語るなかに神によって受け入れられた内容を、善き信仰によって朗読するのです。しかも、無教育な人々はどこでも話の様式を理解していませんし、常に事柄の秩序を見ているわけではありませんから、彼らは話の様式や事柄の秩序に関する注釈者の声によって注意を喚起される必要があります。そうして、それに続いて多くの墮落すべきものが考案され、しかも考案され続けてきました。敬虔な牧者や教師は確かな権威によって受け入れられた真の内容の証人であり、誤った解釈の反駁人なのです。こうした理由によって、神は福音の務めおよび教会と学校における勉学を自ら骨折って保ち、それに続いてわたしたちが預言と使徒の書の番人となり、真の解釈の証人となり、預言者、キリスト、そして使徒によって伝えられた教えと争うすべての意見を反駁する者となるように再建しました。こうして、福音の光が消し去られることのないように、エフェソの信徒への手紙4章にいわれているように⁽⁵⁾、あたかも教会が風によって翻弄されたり分散されたり、真実が失われたり、多様な誤りに巻き込まれたりしないようにしたのです。こうしたことは、しばしば起こりました。異教徒たちは、父祖の教えの光を失い、恐ろしくもさまざまな猛威に翻弄されたのです。彼らは偶像をなだめるために、人間によるいけにえを捧げ、ブリアーボスを崇拜し⁽⁶⁾、夫人や処女を辱めました。こうした何とも多種にわたる狂暴な振舞いは、マルキオンやマニの宗派に発生します⁽⁷⁾。何と冒瀆的で、みだらで、扇動的なことでしょう！ そうしたさまざまな猛威は今では再洗礼派のなかに生きています。彼らはマニ教の悪影響に何と多く染まっていることでしょう！ アリウスにイスラム教の起源があります⁽⁸⁾。何という狂乱が、死者を祈願したり、像を崇拜したり、ミサを売ったり、禁欲の法を弁護したり、エックやピギウス⁽⁹⁾や教皇のよく似た太鼓持ちによる多くの事柄のなかにあることでしょう！

こうしたすべての時代の狂乱の例を敬虔な人々は考慮すべきです。そして、正しい教えの声によって警告され、手と全霊の両方で神から与えられた預言と使徒の書を抱きし

め、解釈とより純粋な教会の証言とを、ちょうど使徒信条やニケア信条のようにひとつにすることで福音の光を保持し、福音の光が消え去ることで結果したといわれているような、そうした狂乱に陥ることのないようにすべきです。真に敬虔な熱心さをもって預言や使徒の書や信条を読み、より純粋な教会の考えを求める者は⁽¹⁰⁾、次に助けられるような人間の解釈を容易に判断し、敬虔な者たちによる真の説明や巧みな定義や、そして証言から得られるところの根源から、何が有用であるかを理解するでしょう。こうした事柄を、もし彼らの意志が純粋であるならば、その熱心さと判定のなかで、神は聖霊によって導いてくれるはずです。そして、悪魔のぺてんに陥ることなく、真の考えを理解し、抱きしめ、保持するように心の向きを変えてくれるでしょう。パウロがいう通りです。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」⁽¹¹⁾。意志に点火されたとき、その結果として敬虔な熱心さは真理を求め、さらに神はそれを助け、そうした労苦がわたしたちや他の人々の幸福となるように、指揮してくださることでしょう。

創造について (SA Bd.1.240 -250.)

神は、自身が知られるようになり、かつ認識されるのを欲しました。したがって、すべての被造物を作り、驚くべき技巧(ars)を用いたのです。それは、ものやことが偶然に存在しているのではなく、永遠の精神、設計者、善、正しさ、人間の行いを見て判断している者が存在するのを、わたしたちに確信させるためです。しかし、こうしたあらゆる自然を考察することが、後にもう一度述べるように、神についてわたしたちに思い起こさせるにしても、それにもかかわらず、わたしたちは初めに精神と目を、すべての証言に向けましょう。この証言において神は自らを教会に対して明らかにしました。すなわち、エジプトから引き出したこと、シナイで声が響き渡ったこと、キリストが死人を蘇らせたこと、復活、昇天、そして永遠の父によるキリストについての声が響き渡っていること、つまり「これに聞け」⁽¹²⁾ といって、聖霊が送られたことへと向けるのです。わたしたちのこうした弱さのなかで、わたしたちにより明確に教え、立証し、確信させるために、これらの証言は公にされ、わたしたちの前に差し出されています。したがって、常に精神をこうした証言の認識へと集中させ、創造に関するこの確かな話を熟考するよ

うにしましょう。次いで、神が自然に刻印した痕跡について、再び考察するようにしましょう。

さて、創造に関する話は創世記1章と他の場所で、しばしば述べられています。つまり、永遠の神、わたしたちの主イエス・キリストの父、子と永遠に共存する一者、そして聖霊、無から天と地、天使や人間、そしてすべての残りの物体を形作った神について。それゆえ、子についてヨハネによる福音書では、次のようにいわれています。「万物はそれ（すなわち子）によって成った」⁽¹³⁾。そして、創造する聖霊については詩編32編で、こういわれています。「御言葉によって天は造られ、主の口の息吹〔聖霊（Spiritus）〕によって天の万象は造られた」⁽¹⁴⁾。さらに、事物が無から作られたことは、この文章が教えてくれます。「主が仰せになると、そのように成り、主が命じられると、そのように立つ」⁽¹⁵⁾。つまり、神がいたり、あるいは命じたりすることで、事物は生じるということです。したがって、ストア派が二つの永遠なるもの、すなわち精神と物質をでっちあげるように、先行する物質から何かが形成されるものではありません。そうではなく、神が言葉を発すると、事物が存在していないところに、存在が始まるということなのです。ヨハネが万物はそれ自身によって成ったというとき、物質は〔無から〕作られないとでっちあげるストア派の考えを反駁しているのです。こうした創造に関する話を、教会のなかで心に留めておくことが必要です。

しかし、この重要な話については、これでまだ十分な言説とはいえません。人間の弱さは、たとえもし神が作成者であると思うにしても、それにもかかわらず続いて、こう考えるようになるのです。ちょうど大工が船を建設してからそこを離れ、それを船乗りに置いていくように、同じように神は自身の作品から離れて、被造物をそれ自身で支配されるように放置していかれる、と。こうした考えは魂を大きな暗闇で覆い、疑いを生じさせます。

他の人々は、ストア派のように、神は第二原因〔連続する原因・結果の連鎖、因果性〕（*causae secundae*）に結びつけられていて、決して第二原因が作り出す以外の仕方では、何も生じさせることはできないとでっちあげます⁽¹⁶⁾。また他の人々は、エピクロス派のように、すべては偶然によって引き起こされ、混乱させられている、とでっちあげます⁽¹⁷⁾。二つのまちがいは人間の精神の内に大きな嵐（*tumultus*）をもたらします。わたしたちは、人間の思慮を超えた危険のなかにいるたびに、自然の原因という考えによってかき乱されます。ちょうど悪が不治のものと判断されるように。というのも、わたし

たちは自然は神なしにそのように生ずると判断するからです。

こうした疑いに抗して、わたしたちは精神を、創造に関する真の話を認識することで強めなければなりません。さらに、事物は神によって作られただけではなく、事物の実体は、依然としていつまでも神によって維持され保持されている、と定めなければなりません。年ごとに神は土地を肥沃にし、土地から穀物を生じさせ、生きとし生けるものに生きることを命じます。このように事物を維持し、あるいは保持することを、通常のいい方では、神の一般的な行為と呼びます。これはしかし、第二原因が生じさせたような仕方以外には何も生じないというように、神を第二原因と結びつけるものではありません。そうではなく、神は最高に自由な行為者なのです。自らの作品の秩序を保持し、やはり人間のために多くの果実を实らせてくれているのです。事物の本性は、モーセ、エリア、エリシャ、イザヤ、そしてその他のすべての敬虔な人々の祈りに従います。ちょうどキリストがマタイによる福音書 21 章で述べているように。「あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言っても、そのとおりになる」⁽¹⁸⁾。同じく、「あなたの重荷を主にゆだねよ、主はあなたを支えてくださる」⁽¹⁹⁾。

神は自身の被造物とともに存在しているのであり、ストア派の神のように存在していないではありません。そうではなく、神はもっとも自由に行為していて、被造物を保ち、その計り知れない慈悲によって治め、善きものを与え、第二原因を助長したり、あるいは妨害したりしているのです。敬虔な人々は、この区別について警告されなければなりません。ゆえに、神は自然の事物とともにいて、それらを支配し制御していると教える証言に、わたしたちは結びつけられていなければなりません。わたしたちが危険のなかにあって、エピクロスやストアのような考えによって意気阻喪されないようにするためです。偶然によってわたしたちは反対に抑圧されているとか、あるいは原因の運命的な秩序は変えることができないと見なさないようにしましょう。二次的な事柄を偶然や、物理的原因に帰したりしないようにしましょう。そうではなく、神は気前よく善を与え、自然を制御していることを認識しましょう。使徒言行録 17 章。「我らは神の中に生き、動き、存在する」⁽²⁰⁾。つまり、わたしたちの生命は神によって与えられ、保たれ、成長を見守られているということです。ヘブライ人への手紙 1 章。「万物を御自分の力ある言葉によって支えておられます」⁽²¹⁾。コロサイの信徒への手紙 1 章。「すべてのものは御子によって支えられています」⁽²²⁾。テモテへの手紙一 6 章には、神についての

記述が付加されています。「万物の命をお与えになる神」⁽²³⁾。テモテへの手紙一、4章。「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を抱いているからです」⁽²⁴⁾。つまり、神は、すべての者たちの生を愛育しつつ、果実をもたらし、人類を守っているということです。そこから神は自らのところに教会を集め、とくに正しくは教会を助けるために、そうするのです。教会において神はその身体だけを愛育するのではなく、その上永遠の善をも授けてくださるのです。テモテへの手紙一、6章。「わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように」⁽²⁵⁾。マタイによる福音書10章。「二羽の雀が一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」⁽²⁶⁾。詩編104編。「彼らはすべて、あなたに望みを置き、ときに応じて食べ物をくださるのを待っている。あなたがお与えになるものを彼らは集め、御手を開かれれば彼らは良い物に満ち足りる。御顔を隠されれば彼らは恐れ、息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、元の塵に返る。あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる」⁽²⁷⁾。詩編145編。「ものみながあなたに目を注いで待ち望むと、あなたはときに応じて食べ物をくださいます。すべて命あるものに向かって御手を開き、望みを満足させてくださいます」⁽²⁸⁾。詩編33編。「主は天から見渡し、人の子らをひとりひとり御覧になり、人の心をすべて造られた主は、彼らの業をことごとく見分けられる」⁽²⁹⁾。詩編147編。「主は天を雲で覆い、大地のために雨を備え、山々に草を芽生えさせられる。獣や、鳥のたぐいが求めて鳴けば、食べ物をお与えになる」⁽³⁰⁾。詩編36編。「主よ、あなたは人をも獣をも救われる」⁽³¹⁾。生きることに関して、教会には特別の約束があり、身体を生かし守るのに多くのことがなされるのですが、それはさらに神が被造物とともにいることを証しています。わたしたちを〔今も〕支え、自然の原因が制御されているということ。詩編33編。「見よ、主は御目を注がれる、主を畏れる人、主の慈しみを待ち望む人に。彼らの魂を死から救いね飢えから救い、命を得させてくださる」⁽³²⁾。詩編34編。「主を畏れる人には何も欠けることがない」⁽³³⁾。詩編37編。「災いがふりかかっても、うろたえることなく、飢饉が起こっても飽き足りていられる」⁽³⁴⁾。ホセア書2章。「彼女は知らないのだ。穀物、新しい酒、オリーブ油を与え、バアル像を造った金銀を、豊かに得させたのは、わたしだということを。それゆえ、わたしは刈り入れのときに穀物を、刈り入れのときに新しい酒を取り戻す」⁽³⁵⁾。同じところで、祝福と呪詛が教えられてい

ます。申命記 28 章。「主は、あなたに与えたと先祖に誓われた土地で、あなたの身から生まれる子、家畜の産むもの、土地の実りを豊かに増し加え」⁽³⁶⁾。同じく、「頭上の天は赤銅となり、あなたの下地は鉄となる」⁽³⁷⁾。申命記 30 章。「それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて」⁽³⁸⁾。箴言 3 章。「主に逆らう者の家には主の呪いが、主に従う人の住みかには祝福がある」⁽³⁹⁾。箴言 10 章。「人間を豊かにするのは主の祝福である。人間が苦勞しても何も加えることはできない」⁽⁴⁰⁾。詩編 127 編。「主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい」⁽⁴¹⁾。ここでは明確に、もし神からの助けがなければ、第二原因は空しいものであると断言されています。詩編 100 編。「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民、主に養われる羊の群れ」⁽⁴²⁾。つまり、わたしたちは偶然によって生まれたのではなく、ただ第二原因によって生きているのでもなく、わたしたちの思慮や力によってでもなく、神によって生かされ助けられている、ということです。

最後に、主の祈りが教えられます。これは日々のパンを神から頂くことを命じています。ゆえに、わたしたちは神が食物を気前よく与え、神によって助けられる場合を除いては、土地は豊かにされることはない、と告白するのです。

創造についての記述を説明し、さらに神が被造物とともに存在し、今も維持し制御していることを断言し、エピクロス派やストア派の見解を退ける、幾多の証言を集めてみました。というのも、神は敬虔な者や祈る者に善きものを約束し、不敬虔な者を罰で脅すからです。神は一貫してその自由を行使し続けていて、決して第二原因に結びつけられているわけではなく、敬虔な者のために多くのものを熟させ、不敬虔な者には多くのものを悪化させるのです。それは実例が示す通りです。偶像崇拜のゆえにアハブの統治下には3年間雨を降らせませんでした、エリヤが祈ると雨が戻ってきました。こうした証言によって、わたしたちは祈りのなかで精神を強化しなければなりません。もちろん、もしエピクロス派の呪文やストア派の意見に賛同したり、あるいは偶然によってすべては生起するとか、神は第二原因を制御していないとする者は、神から食物も生命の保証も求めることはできません。したがって、それどころか神は人間から果実を奪い去ります。というのも、彼らはこれが生まれつきの力のようなものによって自然にもたらされたと見なすからです。さらに、神はこれらを愛育しもせず、与えられた贈り物を敬意をもって用いもせず、贈り主に気遣うこともないからです。ホセアの言説が警告している通りで、すでにこれはもう引用しました。

人間の精神は、この世界が神によって作られたことを示すような記述によって説得されます。しかし、制御する神が今も傍に存在しているということは、たとえ酷い悪事を終わらせるための論拠であるといったことであるにしても、それにもかかわらずここでは判然とはしていません。したがって、これに賛同するのはより困難なので、神に祈り、真剣に神から冀い、善きものを期待できるようになるために、聖なる証言によって魂のなかで信仰が燃え立たせられ、強化されなければならないのです。こういわれているように。「それから、わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう」⁽⁴³⁾。同じく。「主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主に任せよ」⁽⁴⁴⁾。

さて、精神には神、さらに創造、そして創造物のなかに神が現在していること、神の言葉と証言を明らかにすることで第二原因を制御していることに関する、真の正しい見解が確立されます。神の言葉と証言のなかで、神はとくに人間を支配していることを明らかにしています。ちょうどエジプトから人々を引き出したり、死者の復活や預言者、キリスト、そして使徒によってなされた他の奇跡的なことのように。それから、さらに世界の活動を考察し(*aspicere opficium mundi*)、そのなかに神の痕跡を探究し(*vestiga Dei quaerere*)、その明示されたものを集めることは、有益であり愉快なことです。これらはこの世が偶然によって存在しているのでも、偶然の意志によってでもないことを証言しています。そうではなく、この世は永遠の精神である神、万物の創造者によって存在していることを証言しているのです。それゆえに、すべての自然は神を示すために作られているのです。そして、もし人間の精神が最初の光を保ち続けていたならば、神に関するこの知は、はるかに明らかであったことでしょう。今や多くの疑念によって混乱させられてしまいました。しかし、善き精神にとっては、神が存在することを明示するものを保ち続けるのは有益です。ちょうどパウロが世界の活動を考察することへと、わたしたちを誘うように。ローマの信徒への手紙1章⁽⁴⁵⁾。さらに、使徒言行録でもいわれています⁽⁴⁶⁾。とても近くに神はいるのであって、ほとんど手で触れられることができるほどなのです。したがって、簡潔にいくつかの証拠を述べておきましょう。これらについて考えることは、学識にとっても、精神のなかで美しい意見を強めるにも、有益です。

第一に、自然のそのものの秩序が取り上げられます。つまり、その活動を示す結果から見てみましょう。永遠の秩序が自然のなかで偶然に生起することや偶然に存続すること、あるいはただの物質から生じてあることは、不可能です。自然における独自の部分

は秩序あるものです。ちょうど天の動きという永遠の秩序が止まるように。そのように、人間からは人間が、牛からは牛が生まれますし、土地の肥沃さ、川の流れが止まないこと、人間の精神における自然の知にも、秩序があるのです。ゆえに、自然は偶然によって存在しているのではなく、ある秩序をもった精神によって存在しているのであり、それは秩序を理解する精神なのです。

第二に、人間の精神の本性を取り上げてみましょう。理性を欠いたものは、知的なものの本性の原因ではありません。人間の精神は、ある原因をもっています。というのも、人間〔精神〕は自分自身によって存在しているのではなく、他のものから始まり生じているからです。ゆえに、ある知性的な本性の原因が、人間の精神にはなくてはならないのです。したがって、〔こうした精神をもつ人間が存在するためには、その原因としての〕神がいなければならないのです。

第三に、高潔なものと醜悪なもの、他の自然の知、秩序や数の区別を取り上げてみましょう。精神のなかで高潔なものと醜悪なものとを区別することは、偶然には不可能ですし、あるいは物質から生じてくるのでもありません。同じように、秩序や数の知というものは、偶然であることはありえません。ゆえに、ある設計する精神の存在が必要となります。そこで、この二つの事柄〔秩序と数〕は、すべてのなかで〔神の存在を示すのに〕もっとも明白なものとなります。そして、人間の精神と精神のなかに植え付けられたその光が、自然において神について証言している顕著なものであることを考察するのは、価値のあることなのです。確かに自然のなかでこれに気づくことは、実のところ神の存在に気づくことなのです。パウロがいうように、神は自身を明らかにした。つまり、神は人間の精神のなかに、神は存在するという知〔気づき〕を置いたのです。と同時に、その活動から神の存在を演繹することも植え付けたのです。

第四に、自然の知は真実です。神の存在は、自然に万物が示しています。ゆえに、この知〔自然から知られるところの知〕は真実です。このより小さい知〔自然の知〕は、もし〔人間の〕本性が壊されていなければ、より明らかであったことでしょう。しかし、すでに述べられた確かな議論によって、この知は強化されるのです。

第五に、ケセノフォンの著作において、恐怖を引き起こす良心が〔神が存在することの〕証拠として取り上げられています。殺人者やそのほか大きな悪行を行う者たちには、魂のひどい拷問に直面することは確実なのです。たとえ、もし人間による裁きを全く恐れないにしても。したがって、こうした裁きを魂のなかに配置する、ある精神が存在し

ているということになりますが、それは正しい行いを推奨し、そうではない行いを推奨することはないのです。

第六に、社会的政体があります。社会政体は偶然による人間の集合ではありません。確かな秩序と法によって群衆は纏められているのであって、人間の力によってだけでは、それほどまで保持されることは不可能です。経験は、殺人や近親相姦や暴君といった、こうした秩序に危害を加える者たちを、罰へと引きずり出していく、ある神意といったものを証しています。ゆえに、人間にはある永遠の精神といったものが備わっているものであり、それはわたしたちに秩序の理解をもたらせてくれるのです。こうして、わたしたちは社会政体を尊重し、同じく、これを自らの力で維持し防衛しようとするのです。

第七に、一連の動力となる原因の系列からえられた、洗練されたものがあります。作用因のなかで無限に進行していくことはありません。ゆえに、ひとつの最初の原因に立ち至ることが必然となります。こうした事柄を自然学者は、明快に説明しています。というのも、もし無限に前進することがあれば、原因の秩序は全くなってしまい、何ら原因に関連する必要はないことになってしまいます。

第八に、最終目的があります。自然における万物は、決まった用途へと定められています。このように目的を分配することは、偶然によってはありえず、また偶然によってそう止まることは不可能であり、設計者による計画によってそうなされる必要があるのです。

第九に、未来の出来事の予兆があります。未来の出来事は、あるものが他のものの原因であるといったように、ただ世界を動かす予兆だけによって明確に示されるのではなく、教会における予言によってさらにもっとよく示されます。ちょうどバラム、イザヤ、エレミヤ、ダニエルが、王国の変化と帰結とを予言したように。したがって、こうした変化を予見し示す、ある精神が必要となります。

こうした論拠は、ただ神の存在を証言しているばかりでなく、摂理のしるしともなっています。それは、神が人間に配慮し、残忍な悪行を罰し、ある人々を助けることのしるしです。そして、土地の肥沃さは神が人間の生を気遣っていることを示しています。悪行に対する懲罰は、神がわたしたちに正しさを尊重することを命じているのを示しています。さらに、支配に関する予言、政体と学芸とを復興するために、同じく英雄が毒に対して遣わされることは、神が政体のことを気遣っているのを示しています。このことは明白であり、常に善き精神を突き動かしてくれるのです。

確かに他にも多くの論拠を正しく集めることができますが、しかし、それらはより曖昧なので、止めておきたいと思います。人間には法の知識が無駄に埋め込まれているではありません。それによって神は自らが敬われることを欲しているのです。しかし、もし善と悪とを区別する判断力といったものが存在しなければ、これは無駄に埋め込まれていることになってしまいます。しかし、これについては他の場所で説明されます。わたしたちとしては最初の警告に戻るとしましょう。すなわち、常に精神と目とを、あの特別の証言へと向けなければならないということです。そのなかで神は自身を教会に対して明らかにしたのであり、ちょうどエジプトからイスラエルの人々を引き出したり、死人を蘇らせたり、その他の奇跡が示している通りです。これらは預言者、キリスト、そして使徒によって与えられているのです。次いで、わたしたちはこれらを通じて伝えられた言葉を付け加え、ここに神の意志が存在すると定めるのです。神の意志は言葉によって明らかにされています。そこで、わたしたちは哲学あるいは自然の知を福音からは区別するのです。つまり、神の子のゆえに与えられる、罪の無償の赦しの約束〔である福音〕との区別です。法と福音との区別については、その場所 (locus) で述べられます。

罪の原因と偶然性について

(SA Bd.1. 250-263.)

常に賢者はみな、非常に多くのものごとのなかにこれほど多くの自然の秩序があるのに、人類においてはどこからであれ、これほど多くの混乱、悪事や災難、病気や死があることに驚かされてきています。そして、哲学者たちはある部分は物質に、ある部分は人間の意志にその原因を据えます。また、ある一部の者は運命の責任にしますが、彼らは第一の原因とすべての第二のもの、物理的なものと意志的なものとのあいだに必然的な連関がある、といいます。腐敗した哲学から生じたマニ教徒は、神に対して恐ろしく侮辱的な狂乱と道徳に対する破壊を、二つの神、すなわち善と悪から、必然的に引き起こしましたが、その当時の古代教会は、悪の原因とそれに付随するもの〔偶然性〕についてのこうした問いを、根拠なしに打ち壊すことはしませんでした。しかし、敬虔な精神の人々にとっては、神について感じることは、さらに真実の、敬虔な、誠実な教え (sententia) を語ることは、畏敬の念をもってなされることであり、教会における敬虔な人々のもっとも重い判断によって承認された、道徳にとっても有益なものなのです。

ただし、彼らは好奇心や議論好きからこれにこだわるわけではありません。これでは議論の無限の迷路を探ることになってしまいます。

わたしたちはこの真実の敬虔な教えを、両手で全身全霊で抱きしめるべきです。それは、神は罪の原因ではなく、罪を欲してもおらず、意志を罪へと駆り立ててもおらず、罪に賛同してもいないということです。そうではなく、神は罪によって真に恐ろしいほどに怒られています。ちょうどそのすべての言葉が明らかにしているように、不斷の罰と世の中の災難、永遠の怒りによる威嚇によって。それどころか、罪に対する怒りを、神の子は最大限に明らかにしています。彼は罪のために犠牲となったのです。悪魔（Diabolus）が罪の開祖であり、彼〔キリスト〕は自身の死によって、父の巨大な怒りを鎮めるために現れたのです。

したがって、神は罪の原因でも、罪は神によって作られたか、あるいは秩序づけられた状態でもありません。それは神的なわざと秩序とが恐ろしく破壊されたもののなのです。

そうではなく、罪の原因は悪魔の意志と人間の意志にあります。これは自らを自由に自発的に神から引き離しましたが、神はそれを欲することも、それに賛同することはありませんでした。それにもかかわらず、これらは神の命令に背いて、秩序の外で彷徨いつつ、そこに止まっているのです。ちょうどエヴァの意志が神の声から自らを引き離し、秩序の外で彷徨いつつ果実に止まったように。

しかし、たとえもし狡猾な人間が多くこのような解決できないものを集めてくるにしても、それにもかかわらず、わたしたちはべてんの議論は止めて、真の教えを全身全霊で抱きしめ、その伝えられた神聖なものについての証言を保ちましょう。たとえもし、差し出された狡猾な議論のすべてを解くことができないにせよ。ところで、その証言とはこれです。

創世記1章。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」⁽⁴⁷⁾。つまり、神の気に入る、秩序があり、精神の秩序と調和して神聖であり、これから人間が確たる使用に資することができるように作られたということです。詩編5編。「あなたは、決して、逆らう者を喜ぶ神ではありません」⁽⁴⁸⁾。つまり、神は本当に、見せかけではなく罪を憎むということです。ヨハネによる福音書8章。「悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである」⁽⁴⁹⁾。父とは、つまり、偽りの最初の源泉であり原因のことです。しかし、キリストは偽りを実体から区別し、いわばこういいます。確かに悪魔はその実体を他のものから受け取っ

ている。というのも、天使はすべて神によって作られ、その内の若干が後から墮落したからです。ところが、悪魔は何か固有のものをもっていて、それは神から受け取ったものではなく、すなわち偽りですが、それはつまり罪であり、悪魔の自由な意志がもたらしたもののなのです。後に長く話すように、実体は神によって作られたものであり保たれたものですが、それにもかかわらず悪魔の意志と人間の意志とが罪の原因なのです。というのも、自身の自由を誤用する意志は、自己をも神から引き離すからです。

ゼカリヤ書8章。「互いに心の中で悪をたくらむな。偽りの誓いをしようとするな。これらすべてのことをわたしは憎む、と主は言われる」⁽⁵⁰⁾。したがって、神聖な意志において罪を憎むことは見せかけではないので、神が罪を欲していると決して考えてはなりません。

ヨハネの手紙一、2章。「すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出る」⁽⁵¹⁾。

ヨハネの手紙一、3章。「罪を犯す者は悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯しているからです」⁽⁵²⁾。つまり、罪の最初の開祖は悪魔なのです。

ローマの信徒への手紙5章。「一人の人によって罪が世に入り」⁽⁵³⁾。つまり、罪は神によって作られたものではありません。人間が自らの自由によって自身を神から引き離し、神の贈り物を放棄し、そしてそうした自らの破壊を構成に伝えたのです。

ヘブライ語が語るそうした言葉の形態は、わたしが語ったものと決して争うことはありません。「わたしはファラオの心をかたくなにする」⁽⁵⁴⁾など。というのも、ヘブライ語のフレーズはこうした許可を意味しているのは確かであり、力ある意志ではないからです。ちょうど、わたしたちを誘惑にあわせないでください。つまり、わたしたちが誘惑されるとき、わたしたちを誘惑のなせるままに任せないでください、揺らされ減びるに任せないでください、ということです。

さらに、罪とはまず何であるか、熱心に研究する人々がこのことに気づかされるのは有益なことです。その結果、神によって作られたものと罪とが区別されます。これは神聖な秩序の動揺あるいは混乱です。したがって、正しくいわれている通りです。弁証家がいうように、罪は欠陥 (defectus) あるいは欠除 (privatio) である、と。

原罪について明らかにするのは簡単です。というのも、それは精神における暗闇 (tenebrae) です。つまり、神的な摂理、威嚇、そして約束についての知の光も、確たる賛同も持ち合わせていないのです。そして、意志には反感 (aversio) があります。

つまり、畏れも、信頼も、神への愛もなく、心には自然の法に同意する服従もありません。むしろ、動揺し彷徨う傾向 (*inclinatio*) によって、神に反して秩序の外へと運ばれてしまうのです。こうした悪が欠陥であることは不確かではありませんし、これは神によって作られたものでもありません。そうではなく、人間の本性の恐ろしく破壊なのです。したがって、罪の原因は神ではありません。たとえ神が実体が繁殖していくのを助け保つのであっても。それにもかかわらず、神は今あるような人間たちのまともに援助してくれます。ちょうど職人が杯を金からではなく鉛から作るように。神は人間の破壊によって真に恐ろしく怒られています。もちろん、神はこの怒りを宥め、本性の傷を癒すために子をお送りになりました。したがって、神はわたしたちとともに生れついている欠陥の原因ではないということが理解されます。神は悪を欲してもおらず、それに賛同してもいないのです。

しかし、こうした詭弁は反駁されます。欠陥がないとき、つまり、積極的なものがないのに、なぜ神が無によって怒られることになるのか。これには、次のように応答しなければなりません。欠如の無と消極の無とのあいだには大きな違いがある、と。欠如の無と理解されたものは従う者 (*subiectum*) を求め、この従う者のなかに何らかの破壊があるからです。このゆえに、従う者ははねつけられます。ちょうど、建物の崩壊がその塊のなかの破壊であり、あるいは分散した部分であるように。このように原欠陥〔原罪〕(*vitium originis*) は人間それ自身の部分の汚れ (*inquinatio*) であり混乱 (*confuso*) なのです。これを神は憎み、それゆえに従う者に怒るのです。病においては欠如は何も意味されていません。それは従う者に止まり、従う者のなかにある種の混乱があるからです。アレクサンダーの馬が、すでに否定的なものではないように。

このような平凡な説明でも十分です。それは真実であり、しばしば考えることは学者に何らかの光を与えてくれますから。わたしたちはより細かい議論に入り込み、抜け出せないような迷宮を探究してはなりません。幾何学は描かれ、目に従わされます。ここでわたしたちが語っている事柄は、そのように描かれたり目に従わされたりできないことは真実です。しかし、注意深く考察することによって、わずかにより多く理解されるようになります。鋭い傷で苦しむ者は痛みますが、その人は傷が消極的なものではないことを知り、引き裂かれた部分があることも知ります。同じようにパウロはネロの悪行や悪徳を見て苦しみましたが、これは消極的なものではなく、神的なわざによる忌むべき禍であることを彼は認識しています。こうした考察のなかで、何が悪であり、ある

いは欠陥であり、あるいは欠如であるかを学ぶとき、わたしたちは罪が弱められるべきものではないことを認識します。ちょうど神のわざにおける秩序のように、すなわち人間のなかで、事物は神によって作られ、神に喜ばれ、人間を保持するものは、それゆえに優れた善であるといわれるのです。それゆえ、反対に秩序の混乱はそれらの破壊であり、神によって作られたものではありません。そうではなく、それは悪魔によって成し遂げられ、人間の意志によるものであり、神からは拒絶されるもので、悪魔と人間にとって破壊的なものでもあります。したがって、これらの崩壊、あるいは破壊、あるいは混乱は、悪と呼ばれるのです。つまり、神的な精神とは調和せず、神から嫌われ、悪魔と人間にとって破壊的であるからです。〔神は無秩序、不調和、何ものであれその破壊を望んではないからです。〕

このような説明は現実的な罪について述べるのに多少の光を与えてくれますが、これについてはややこしい問題が多くあります。しかし、この場合でも、もし行為のみを見つめるのではなく、行為を導く精神を見つめるのなら、欠陥を理解するのは簡単です。果実を食い尽くしたエヴァは神の光によって導かれているわけではありません。彼女は神の光によって導かれているのではなく、神から離反した意志によって導かれているのであり、それが欠陥であり、このことは明確です。たとえ、もしそのあいだに外的かつ内的刺激が加わり、それが積極的なものであるとしても、たとえ、もし誤った刺激やある種の秩序の混乱があるにせよ。ちょうど、たとえば船が帆も櫂もなく、風や嵐によってさまざまに揺動かされるように。とにかく、こうしたイメージがその欠陥を明らかにしています。しかし、船が止まる限りは、多少の動きも残るのであり、ゆえに人間が生きている限り、とにかく多少の運動が、どれほど誤りや乱れが多くとも、わたしたちの内には残っているのです。それゆえに、神は罪の原因ではありません。というのも、たとえもししばらくのあいだ本性を保つにしても、それにもかかわらず精神におけるその欠陥は神からもたらされたものではないからです。エヴァの自由意志は固有なものであり、その行為の原因であることは本当であり、自ら進んで神に背くのです。

しかし、神は罪の原因ではなく罪を欲することもないという、この見解が打ち立てられますと、当然の結果として偶然性 (contingentia) が存在することになります。これは、生起するすべてのものごとは、必然的に生じるわけではないということです。というのも、罪は悪魔と人間の意志から生まれたのであり、神の意志によって作られたものではないからです。意志は罪を犯すことができないようにも作られていたのです。さらに、

私たちの行為の偶然性の原因は、意志の自由にあります。そして、この箇所でわたしたちは人間の行為の偶然性について語っているものであり、その他の事物の運動、自然において論じられることについてではありません。

次に、使徒による書が墮罪の後の今でも依然として人間にある種の自由を帰していることが、認められなければなりません。その自由とは、理性に従う事柄を選択する自由であり、神の律法によって命じられた外的な行いをする自由のことです。したがって、確かに律法による正しさ〔律法的な義〕は肉の正しさ〔肉の義〕といわれています。というのも、こうした自然の力によって、それらの外的な規律はできる限り (*utcunque*) 保たれることができるからです。パウロがいうように。「律法は、正しい者のために与えられているものではありません」⁽⁵⁵⁾。つまり、再生していない者を強制し、命令に従わない者を罰するために与えられている、ということです。同じく、「律法は、わたしたちをキリストのもとへと導く養育係となったのです」(*Lex est Paedagogus.*)⁽⁵⁶⁾。もし、こうした自由がある程度でも人間の本性のなかに残っていなかったとすれば、律法にも統治にもすべての市民的な支配にも、何も有効性しないことになってしまいます〔あってもムダになってしまいます〕。したがって、わたしがいったように、偶然性の源となるような自由は何らかの仕方で (*aliqua*) 残っているのです。

しかしながら、神は偶然性に境界を設けていますので、区別が保たれなければなりません。神は一方で意志すること、他方で意志しないこと、というように境界を設けました。一方は神自身の意志にかかっていること、他方は部分的には神自身が行うのですが、部分的には人間の意志によるのです。

神はサウルの過ちを予見していますが、彼に自らの意志を打ち当てることは欲しませんでしたし、サウルの意志がそのように進むよう許しています。そして、まずい具合に行動するのを促すこともありません。にもかかわらず、そのあいだにサウルはどこで抑制されるべきか、判定します。したがって、この神の予見は必然性をもたらすものでも、人間の意志のなかで行動の仕方を変えるものでもありません。これ〔人間の意志における行動〕は今なお (*adhuc*) 人間の本性のなかに残っています。これは、つまり依然として残っている自由のことなのです。

神が保つ本性が、偶然性あるいは自由を妨げることはしません。というのも、しばらくのあいだエヴァの意志が自らの行動の原因であったにもかかわらず、自由は創造において人類に授けられた贈与であるため、神的な扶助は、この贈与を妨げることはしなかつ

たのです。さて、このように自由がどれほどであっても、それは神的な扶助によって妨げられることはなく、そのようにして神はサウルを保ったのでした。つまり、サウルの意志が悪しき行動のもともとの原因なのです。

ここでいわれたことに関して、確かに次のようなある反論が起こります。エレミヤ書10章。「主よ、わたしは知っています。人はその道を定めえず、歩みながら、足取りを確かめることもできません」⁽⁵⁷⁾。たとえ、後に自由意志についてという題目のところで、ここでいわれていることが説明されるにしても、それにもかかわらず読者はここで簡単に注意されなければなりません。意志の選択について語ることと、その結果や成果について語ることとは、別なのです。ポンペイウスはカエサルに対して戦争を望み、それを自由に意志しましたが、他の多くの原因が、ポンペイウスの意志のみならず、出来事を支配しました。したがって、エレミヤがいうことは教えとともに、もっとも快い慰めを含んでいるのです。人間の道 (via hominis)、つまり、人間に命じられた私的かつ公的な支配あるいは使命は、人間の力だけでは果たすことはできないのです。人間の精神はすべての危険を見通して、これに警戒することはできません。それはしばしばぼんやりしていて、ヨシアがエジプトに対して兵を挙げたように誤るのです⁽⁵⁸⁾。それどころか、あらゆる賢人たちによる悲しい間違いはたくさんあるのです。キケローが嘆くように。おお、わたしはどんな場合でも決して賢くはない⁽⁵⁹⁾。数多くの過失が起こり、それは人間の計画〔思慮や判断〕(consilium) に入り組んだ困難をもたらすのです。ひとつの過失が、しばしばとてつもない禍を引き寄せます。ちょうどダビデの姦通のように。次に、よい思慮・判断やよい原因と、しばしば結果は一致しません。突然に大きな不運が生じうるのです。それは自身の頂点から、まさにこういわれているように、引きずり落とすのです。

人間に関わるものはみな細い糸でぶら下がっており、
突然の出来事でかつて強かった者も減びてしまう⁽⁶⁰⁾。

これほど多くの妨害、人間の弱さ、そして人間の事柄の不安定さについて、これらにはたくさん不思議な原因があるのですが、エレミヤは熱弁をふるっているものであり、それと同時に、神へと避難し、神に冀い、そしてその支配と援助を待ち望むことを教えているのです。

したがって、次の約束がしっかりと保たれなければなりません。「実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である」⁽⁶¹⁾。同じく「わ

わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」⁽⁶²⁾。同じく「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」⁽⁶³⁾。同じく「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」⁽⁶⁴⁾。同じく詩編 37 編。「主は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を備えてくださる」⁽⁶⁵⁾。こうした約束を信頼して、わたしたちは神からの援助を冀い期待するのであり、もし神がわたしたちを助けてくれなければ、安全はもたらされないことを、わたしたちは認識するのです。キリストがいうように「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」⁽⁶⁶⁾。さらに、洗礼者はいます。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない」⁽⁶⁷⁾。

ポンペイウス、ブルトウス、アントニウスや他の多くの者たちは多大な努力をしましたが、しかし、神は他の者を導きました。したがって、とはいえこうしたことは、善における神の援助や行動の安全について熱弁しているとはいっても、それにもかかわらずそこからすぐに人間による選択の自由はないと考えてはなりません。それどころか、ここですべての善と悪とが、必然的に神から生じてくるということがほとんどなくなるのです。そのためにエレミヤがいうことは、巧みに理解されるわけで、それはつまり人間の考えや力だけが安全をもたらしのではないということなのです。

あらゆる仕事をするなかで、わたしたちが安全をもたらし神の道具であるように、わたしたちが助けられているというのは、神による大きな力強い贈与であることを、わたしたちは学びます。ファラオやネロやマニのように、わたしたちは人類の禍の元として打ち捨てられたものではないということは、神からの贈り物なのです。そして、毎日キリストがいうこのことを心に留めるのです。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」⁽⁶⁸⁾。神によって導かれるように、わたしたちは熱心に嘆願し祈るのです。さらに、ここから神が実効的な罪の原因であるということが帰結しなくなるということは明白です。それどころか神の教会は、神が真実であり、真剣にひどくネロの放蕩を憎んでいることを知っているので、必然的にそれが起こるとか、神の意志によって起こるとかいうことは、決してないのです。

エフェソの信徒への手紙 1 章にある、次の言葉が非難されることもあります。「キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました」⁽⁶⁹⁾。さらに、コリントの信徒への手紙一の 12 章。「働きはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなされるのは同じ神です」⁽⁷⁰⁾。ここでいわれていることは、神が建て導く自身の教会のな

かで、その教会や幸福をもたらす行為についていわれている場所においては、確実です。しかし、すべての事物が神によって保たれているとか、個々のすべての生き物の動きとかについて、いわれているわけではありません。したがって、ここでいわれていることが巧みに理解されれば、自然のままの意味から未熟なものへと翻訳されることは、決してないのです。

ここでパウロは、人間の思慮や力によって教会が維持され支配されているのではなく、驚くべき神のわざによってである、と注意しています。洪水のなかでノアが救われたこと、エジプトや砂漠で人々が守られたこと、モーセやヨシュアやサミュエルやダビデや、そのほか敬虔な者たちによって行われた事柄は、彼らのなかで神が引き起こしたわざであったし、今もそうなのです。それは、教会を助け、真の教えを広めるためなのです。

それゆえに、こうした言説は慰めとなります。というのも、それは神が自らの教会の一員として存在していて、彼らを危険や苦難のなかで助けてくれることを証しているからです。神はダビデの戦争を助けました。死にそうなラウレンティウスが恐怖によって打ちのめされて信仰告白を打ち捨てないように、助けました。したがって、こうした言説や約束によって、わたしたちは自身を強め、さらにわたしたちが導かれるように祈るのです。しばしば預言者たちが叫んだように。「あなたのまことにわたしを導いてください。教えてください」⁽⁷¹⁾ など。あなたは、あなたの教会ですべてのことを幸いに成し遂げます。わたしのなかにおいて、そのうえあなたの教会の一員のなかでのように働いてくださいます。わたしを幸福の道具と憐れみの用具としてください、など。さらに、こうした言説による説明は、多くの他の似たような事柄に対しても光をもたらしてくれます。最後に、必然性には二つあることと正しくいわれることが付加されなければなりません。一方の必然性は、事柄や観念が単純に必然的である場合、絶対的なもの(necessitas absoluta)と名づけられます。さらに、全く不可能な反駁が置かれ、すべてのことが破壊されてしまう場合です。次にあげることは、必然性による必然の絶対的なものの提示です。神が存在すること、神は本質(essentia)であり、知性であり、永遠であり、計り知れない知恵であり、力であり、正しさであり、善であり、正義を望んでいて、清廉であること、自身の精神との争い、残酷な不義、情欲の情婦などを望んでいないことなどです。

しかし、もう一方は帰結の必然性(necessitas consequentiae)です。これは自らの本性によって異なる状態でありえるような事柄や観念なのですが、先行する原因あるい

は決定のゆえに必然となったものです。そして、このなかには大きな違いがあります。他の場合には、神は欲している善を規定し、それがどのようなものであるか多く表現しています。死者がある日に蘇るであろうというように。これは帰結による必然の必然性です。他の場合には、神は欲していない悪を制限しています。すなわち、神は境界を設け、それ以上に悪が暴れまわるのを放置しないようにしているのです。それゆえ、ファラオがイスラエルを攻撃したのは、必然ということになります。これは、彼の本性による必然ではありません。実際には降りかかってきた〔偶然的〕もののなのです。それでも反対のことが起こるのは不可能であったでしょう。しかし、このような結果になったので、それは必然の帰結による必然性と呼ばれるのです。こうした簡単な区別は役に立たないものではなく、しばしば学校で教えられているものですが、それによって、わたしたちはどの出来事が神の意志により、またそこに由来するのか、どれが他のところから由来するのか、考慮するのです。

さらに、ここで自然の必然性についても語られなければなりません。ちょうど火が必然的に熱し、太陽が必然的に動くことなど。しかし、こうした自然の必然性についても、教会の教えは帰結による必然性であるといえます。このように太陽が動くのは、神がこのような秩序を設けたからであり、それは変えることもできるからです。ちょうどヨシュアやエゼキエルの物語が明らかにしているように。これについては後に十分語られます。

こうした問題においては論じられることが常である、主要な主題について述べました。入念に巧みに熱心に考える者は、こうしたすべての議論を判断することができますし、ストア派の意見が教会に決してもちこまれるべきではないということを、はっきりと理解します。というのも、すべてが必然的に生起すると思っている者が、どのように神に祈るのでしょうか？ 次いで、彼らは悲劇のなかに語られているように、道徳にとって有害です。運命そのものに罪があるだから、だれも運命を傷つけずにおこう。ちょうどゼノンの僕は、自分が不正に罰せられたといいました。というのも、運命に強制されて罪を犯したから、というのです。したがって、わたしたちはそうした話や意見を遠ざけます。偉大なプラトンは『国家』の第二巻で語っていますが、次のような言葉です。「神が善き者でありながら、誰かにとって諸悪の原因となるような主張に対しては、もし国が善く治められるべきならば、自分の国において何びとにもそのようなことを語らせないように、また老若を問わず何びとにもそれを聞かせないように、われわれとしてあらゆる手段を尽くして戦わなければならない」⁽⁷²⁾。このような者は、決して敬虔な者とはいわ

れず、国家にとって有用でもなく、解決において首尾一貫することはないのです。

わたしは慣例の議論の説明を付け加えておきたいと思います。それは敬虔な精神にとっては有益であるように見受けられるからです。というのも、次のような反論があるからです。第二原因は第一のものなしには生じない。第二原因とは、エヴァの意志のようなものであり、これは罪のものと原因です。ゆえに、これは依然として第一原因なのです。この反論によって、才能のある者がときどき混乱させられるのを、わたしは知っています。そして、そうした混乱から、ばかげた見解へと滑り落ちるのを。しかし、たとえもし答えが、滑り落ちる者に対して、いわば弱々しく掴みどころがないとしても、それにもかかわらず、他のより重く、そして非常にはっきり見えるものを伝えたいと思います。それは、次の根拠から手に入れます。神は創造物とともにいて、第二原因と縛りつけられたストア派の神のように、そこにいないわけではないからです。結果、神は単一に動かすのです。ちょうど第二原因が動かすように。しかし、むしろ神は自然本性を維持し、自らの計画によって、あるものから他のものへと働く、自由な行為者なのです。

物質において、たとえもし神が自然を維持するとしても、それにもかかわらず秩序に反して神は、ときどき太陽が戻るのを命じます。まる三年間雨が降るのを妨げ、それから突然豊富な雨を送ったりしますし、老女が妊娠できるようにしたりします。このように、毎日わたしたちは第二原因に逆らって、物質においては多くのことが生じるのを知っていますが、それにもかかわらず、神がこれらを維持されているのです。多くの人々が、病気や戦闘や水のなかで、さまざまな危険から、解き放たれます。第二原因によって見捨てられたところから。したがって、祈りが正しくなされるようになるために、神はこのような自ら活動して現在していることを、わたしたちは覚えておきましょう。ストア派がでっちあげるように、第二原因に縛り付けられているのではなく、神は自然を維持していて、多くの事柄はその自由な思慮によって制御していることを。このように神は意志をもって行動しています。秩序によって行動する者を維持し援助しながら。しかし、秩序に反して突き進む者を助けはしません。たとえもし、それらを維持するにしても。すなわち、神はエヴァが自由な行為者であるように、その意志を作りました。それは秩序を維持することも、それから離反することもできたのです。したがって、こうした込み入ったことの解決は、こうなるでしょう。第二原因は第一原因なしには働かない。すなわち、それを維持しているものなしに。これは普遍的な真実ですが、いつも助けになるわけではありません。というのも、第一原因は、それが意志していないものの結果を

助けるわけではないからです。したがって、エヴァが自らを神から離反させたとき、彼女の意志が自らの行為の直接の原因ということになるのです。

ストア派もキリスト者も同じように、次のような見解を理解しません。第二原因は第一原因なしには働かない。というのも、ストア派は、善であれ悪であれ、すべてのものごとにおいて、似たような繋がりを考えるからです。ちょうど、生殖において夫と妻との本質的な結合があるように。しかし、キリスト者は善と悪とを区別しなければなりません。第二のものは第一のもの、つまり維持しているものなしには働かないのです。しかし、第一原因は第二原因に逆らって多くのことをします。というのも、これは自由に行動するからです。そして、ちょうどエヴァの意志が第一原因の助けなしに誤って行動したように、第二のものは自由なのです。というのも、自由にはそのような力があるからです。これが明白な説明であって、ほぼ十分な説明なのです。

他の人々は、こういいます。第二原因は、何か積極的なものを生み出す第一原因なしには働かない。第二のものは、エヴァの意志のように、いくらか誤ったことを行うのです、と。これには、次のように答えます。第二のものは積極的には働かないが、しかし、逸脱し離反して働く、と。こうした解決は、もしそのように説明されれば、より明快になるでしょう。そして、こうしたあいまいな解決の意味は、次にふさわしいもののなのです。すなわち、第一原因と第二原因の繋がりは、神は自由に行為することを意志し、夫と妻との結合のことをわたしたちが考えないようにする、というように見なされることなのです。

こうした議論は難解です。したがって、神について考えるわたしたちは、精神と目とを神の啓示に向けるのです。すると、神が自らを明らかにしたように、わたしたちは神を認識するのです。そして、神は自由に現在し祈る者を助けると、結論づけるのです。こう約束されているように。「主を呼ぶ人すべてに近くいまし、まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし」⁽⁷³⁾。

個々の行いや援助に関するこうした言説は、魂に教え込まれなければなりません。というのも、神によって一般的に保たれていることに関する、そうした分かりにくい議論は、完全に確かめられることができないからです。決して創造が理解されないように。そこで、要するに、次の見解を保つことにしましょう。神は自らの働きとともに現在している。ストア派の神のようにではなく、自由に行為する者として真に現在し、被造物を保ち、多くのものを支配しているのである。

人間の力あるいは選択の自由〔自由意志〕について (SA Bd.1. 263-280)

ヴァッラと他のほとんどの人々は、万事が神の決定によった生じることがゆえに、人間の意志から自由を取り去ってしまいました。こうしたストア派の議論に由来する空想は、彼らに対して、善きかつ悪しき行いの、それどころかすべての動物や元素における動きの偶然性を取り去るように誘います。しかし、すでにわたしたちは、教会にそうしたストア派の意見を持ち込んだり、すべての運命の必然性を擁護すべきでもなく、相当の偶然性を認めるべきである、と述べました。アレクサンダー大王が〔酒に酔って〕クリートゥスを殺すのは必然ではなかったのです。

神的な決定に関する議論と自由選択〔自由意志〕に関する問題を混合すべきではありません。というのも、人間の意志とその他の人間の力について探究されているとき、ただ人間の弱さについて論じられているのであって、全自然におけるすべての動きについてではないのですから。わたしたち自身は、わたしたちの精神の暗闇、意志と心の弱さを考察します。わたしたちの生き方に関して、こうした教えを教会は提示するのであって、ストア派のような教えを植え付けたり、精神を入り組んだ抜け出せない議論と絡み合わせたりするのではなく、わたしたちに対して神の子による恩恵を示しているのです。子は、人間の本性に悲劇的傷を負わせた悪魔の行いを滅ぼすために送られたのです。

しかし、自然学から定義や人間の部分についての名称を取り入れたりする未熟者に対しては、預言者や使徒の表現に向かうよう、わたしたちは忠告しなければなりません。

人間のなかには、認識し判断する部分〔器官〕がありますが、それは精神 (*mens*) あるいは知性 (*intellectus*) あるいは理性 (*ratio*) と呼ばれています。この部分に知 (*notitiae*) が備わります。他の渴望する部分は意志 (*voluntas*) と呼ばれていますが、それは判断 (*iudicio*) に従うか、あるいは逆らいます。そして、意志の下には感覚 (*sensuum*) または情念 (*affectus*) の欲望 (*appetitus*) があります。この欲望の主体 (*subiectum*) および源泉 (*fons*) は心 (*cor*) です。これはときどき意志と一致したり、ときどき意志に反したりします。意志の下には運動 (*locomotiva*) があります。こうしたものの豊富な説明を、わたしたちは自然学から手に入れています。

しかし、精神と意志とが一致しているもの (*mens et voluntas coiunctae*) は、自由選択〔以下では自由意志に統一〕(*liberum arbitrium*) と呼ばれています。あるいは自

由意志は、示されたものを選び求める、もしくはそれを拒む意志の機能（*facultas*）とも呼ばれます。そうした機能は元の自然本性においては（*in natura integra*）、大いに優れたものだったのですが、後に述べるように、今ではさまざまに制約されています。しかし、今はもっとも一般的な名称について説明します。ファブリキウスがフィリウスから差し出された黄金を受け取るのを拒んだのは、自由意志によってでしたし、あるいはアンティゴヌスが殺されたフィリウスの運ばれてきた頭を見るのを拒んだのも、自由意志によるものでした。さらに、預言者や使徒の話のなかには、精神と心といった名称がありますが、それは両者とも正しく知性および意志として用いられていて、見せかけのいくらか意志のようなものとしては用いられていません。ここでは、真の判断と渴望が捉えられていて、見せかけの、ただ外的な行動ではありません。しかし、自由意志に関しては長い議論がありまして、勤勉な人々によって簡単に判定されます。こうしたことは省略して、わたしたちは事柄について述べましょう。

というのも、人間の意志が自由かどうか、それは教会のなかで問われてきたのですが、そして、どこまで人間の意志は神の律法に従えるのかどうか、と疑われている場合、わたしたちが生まれついている罪の大きさや、もしくは本性の弱さが考察されない限り、こうした議論については判定されえません。同じく、神の律法によって、外的市民的な行いだけではなく、永続的かつ完全な人間本性全体の従属が求められていることを知らない限り、判定できないのです。次に従って。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、手を愛しなさい」⁽⁷⁴⁾ など。というのも、もし人間の本性が罪によって破壊されていなかったなら、神について明瞭で堅固な知を保持していたことでしょう。神の意志について疑うことなく、真の畏れ、真の信頼を保持していたことでしょう。要するに、律法のすべてに従っているのを示したことでしょう。つまり、人間の本性のなかで神について定めた光はより強力であったことでしょう。そして、すべての者の運動〔情動〕は神の律法と一致していたことでしょう。しかし、今では元の病〔原罪〕によって完全に打ちのめされた人間の本性は、神に関する疑いに満ちていて、神を真に恐れることもせず、神に真に信頼することもなく、神への愛に燃えることもなく、その多くの炎は悪徳の情念となっています。したがって、人間の本性は決して神の律法を満たさないと明らかにされたとき、人間の意志は何をどこまでなしうるのか、問われているのです。

したがって、わたしは最初にこう答えます。人間の本性には、理性や感覚に従うものに対する、ある種の判断や選択が残っているがゆえに、依然として外的な市民的行い

に対する選択は残されていることになります。それゆえに、人間の意志は自らの力によって再生することなく、ある程度は (aliquo modo) 律法の行いを外的にすることができます〔律法の外的行い〕。これが哲学者たちが人間に正しく帰している意志の自由 (libertas voluntatis) というものです。というのも、パウロは霊的な正しさから肉的な正しさを区別して、再生していない者でも、外的な律法に対してある種の選択を有し、殺しや、盗みや、略奪に手を下すのを抑えるように、ある種の行いをすると告白しているからです。そして、これを肉の正しさと呼んでいます。

それどころか、さらにこの規律 (disciplina) を神は再生していない者たちに命じ、彼らの暴力をもっとも厳しい罰によって、この生において規則に従って罰します。殺人者や不貞者に対する極刑が明らかに示しているように。したがって、こういわれます。「律法は、正しい者のために与えられているものではありません」⁽⁷⁵⁾。つまり、再生していない者たちを強制し、命令に従わない者たちを罰するために、与えられているのです。同じように、「律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです」⁽⁷⁶⁾。つまり、これは強制と教示、そして確かな (キリストへという) 付け足しがされていて、それゆえに敬意を表して規律が賞賛されているのです。確かに、たとえ規律が罪の赦しに貢献もせず、それによって神の前で正しいといわれるような正しさでもないにせよ、それにもかかわらず、キリストについてそのあいだに彼らが教えられることが可能であるために、それは必要なのです。良心に反する違反のなかに固執する強情者のなかで、聖霊は有効ではありません。しかし、なぜ規律が必要であるか、その原因については、後に話しましょう。今ここではただそうした証言、すなわち肉の正しさには若干の選択、つまり、再生していない者のなかにも外的に律法を行う自由があるということから、明らかにしていきましょう。

しかし、それにもかかわらずここでは、この自由そのものが二つの原因によって著しく制約されていることを、わたしたちは知らなければなりません。すなわち、わたしたちに生まれつきの弱さと悪魔によって。というのも、人間のなかの邪悪な情念は狂暴な刺激〔わたしたちを駆り立てるもの〕であり、魂の大きな炎だからです。人間は、しばしば精神の忠告に反して、それに従ってしまいます。もし努力して自らを抑制することができる場合でさえ、メディアがいう通りです。「でも、不思議な力が、いやがるわたしをおさえつける。情熱〔情念〕と理性とが、別々のことを勧める。どちらがよいのかはわかっていて、そうしたいとは思うの。でも、つい悪いほうへ行ってしまう」⁽⁷⁷⁾。パ

ウロは、エフェソの信徒への手紙2章で、力強い悪魔は不敬虔な者のなかにいる⁽⁷⁸⁾、と述べています。ここでもまた、悪魔は規律の支配を全人生に渡ってさまざまに妨害し、盲目で狂った者たちを、もっとも悲惨な悪へと突き落とそうと駆り立てるのです。サウルとユダについて、彼らのなかにサタンが入り込んだ、とはっきりと記されているように⁽⁷⁹⁾。そして、そうした非常に狂乱した者たちは偶像を拝み、暴君による冷酷、市民による戦争に陥りましたが、それは紛れもなく悪魔による仕業なのです。ちょうど、クサンティウスと他の多くの者たちが自分たちの街に自身で火をつけ、自分たちと妻たち、そして子どもたちをも火のなかに投げ込んだように。したがって、あらゆる時代の歴史や日々の経験が教えてくれるように、人類の非常な弱さがここにはあります。このなかでは、ちょうど異教徒の賢者のすべてが、こうした混乱し、もっとも悲惨な墮落という本性がどこに由来するのかと大いに驚くような、多くのぞっとするような悲惨が見受けられます。しかし、それにもかかわらず、こうした〔悪魔による〕妨害のなかでも、ある程度の選択、外的な振舞い〔習俗・慣習・道徳など〕(mores)を支配するある程度の自由は、適度に健康な者のなかに残されています。

第二に。しかし、神の教会においては外的な振舞いについてだけ述べられているのではなく、心のなかで律法全体を成就することについても語られています。再生していない者の精神は神についての疑いで充滿していて、心は神への真の畏れを欠いていて、真の信頼もなく、神の律法に逆らう激しい衝動をもっています。つまり、人間の本性は罪と死によって制圧されていて、人間の判断によってこれらの大量の悪は認められず、それらは神の言葉のなかで明らかにされるのです。人間が、わたしたちとともに生れついたこうした邪悪を捨て去り、あるいは死を脱する自由をもたないことは、確実です。こうした人類の巨大で特別な悪を、わたしたちは自由意志が弱められているときに見出します。意志はわたしたちに生まれつきの邪悪を焼き尽くすことも、神の律法を満たすこともできません。というのも、神の律法はただ外的な規律や見せかけの行いを駆り立てるだけではなく、心の全体が従うことを命じているからです。律法が、こういうように。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」⁽⁸⁰⁾など。

律法は人間の本性にある罪に判決を下し断罪しますが、取り除きはしません。そして、わたしたちが死を逃れられないのと同じように、わたしたちとともに生れついた邪悪、それは神の律法と戦うのですが、これを焼き払うことはできないのです。こうした悪を

わたしたちは認識しなければなりません。その結果として、反対側に (e regione) キリストの恩恵が見つめられることになります。それは罪と死を取り除き、人間の本性を更新するのです。人間の意志が取り除くことのできない特別な悪について、今まで話してきました。その限りでは、つまり自然本性の邪悪と死とを取り除くのに、ゆえに意志は囚われていて、自由ではないのです。

第三に、霊的な行いについて問われます。というのも、世界の始まりから教会のメンバーは生きていましたし、今も生きているからです。彼らは、ただ人間の力あるいは人間の気配りによって支配されているのではなく、彼らのなかで聖霊が霊的な衝動を刺激し、神の認識、畏れ、信仰、愛、そしてその他の徳が、ある人にはより大きく、またある人にはより小さく激しかったからです。このことを哲学者やペラギウス主義者は嘲りますが、それにもかかわらず、信じる者の心のなかに聖霊が注ぎ込まれているのは、極めて真実です。ちょうどゼカリヤ書でいわれているように。「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ」⁽⁸¹⁾。そして、わたしたちは極めて大きな慰めがわたしたちに差し出されているのを知ることになります。それを、わたしたちは、自分たちのこれほど弱さのなかで、いつも見ておく必要があるのです。

神の恩恵 (beneficium) は巨大で言表し難いものです。というのも、それはわたしたちに聖霊の援助を約束するからです。ちょうどキリストがいう通り。「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」⁽⁸²⁾。もし、わたしたちが聖霊によって援助されなかったら、大きなより悲しむべき没落やより悲惨な道德の混乱が生じていたことでしょう。ちょうど、異邦人や再洗礼派の熱狂者がそうであったし、今もそうであるように。しかし、この考えは真実である、とわたしたちは保持しなければなりません。つまり、人間の意志は聖霊を抜きにしては霊的には何も成就できないのです。すなわち、神が要請するところの、神に対する真の畏れ、真の信頼、神の憐れみ、真に神を愛すること、苦しみや死に近づくなかでの忍耐と勇敢といったことを。ステファヌス、ラウレンティウス、アグネス、そして他にも数え切れない人々が、巨大な不屈の力によって死を乗り越えたように。

ペラギウス派を抑え、聖霊の援助を冀うことへとわたしたち自身を駆り立てるために、また、聖霊によって支配されておらず、教会の一員としての生活にいない者たちを教育するためにも、証言が集められなければなりません。

ローマの信徒への手紙8章。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」⁽⁸³⁾。

また、「キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません」⁽⁸⁴⁾。

この二つの文章は十分に明白で、永遠の生の相続者が与えられており、聖霊によって支配されていることを明瞭に証言しています。そして、こういわれるなかで神の霊が理性を意味するのではなく、聖霊を意味していることは確実です。この聖霊は、父なる神、わたしたちの主イエス・キリストから生じ、敬虔な者の心に送られ、福音と神の律法に一致する情動（motus）を通じて、神の認識を点火します。

コリントの信徒への手紙一の2章。「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません」⁽⁸⁵⁾。すなわち、自然の（ψυχικός）人間とは自然の生命を生きている者を意味し、これは、聖霊なしの、自然の感覚と理性によって生きている人間です。このように、この箇所パウロは自然〔動物として〕の人間と霊的な人間とを区別しているのです。というのも、人間には自然にある神的な律法の知が刻印されているにもかかわらず、摂理に関する大きな疑いがさらに加わるからです。そして、大きなさらに悲しむべき疑いが、わたしたちは受け入れられているのか、あるいは聞き入れられているのか、と福音についても生じます。自らの暗闇について各人の心は、真に神は罪について怒っているのかどうか、苦しみのなかで受け入れられているのか、聞き入れられているのか、助けられているのか、と判断するのに熟考するのです。こうした考察のなかで、パウロの言葉は、魂の無頓着と無関心、もしくは神からの逃走と理解されます。「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません」。これはつまり、神が罪に対して怒っていると真に判断することも、怒りを感じることも、神を恐れることもない、ということです。ちょうど、姦通を犯したダビデがまだ神の怒りを感じず、後になってそれを感じ、再び聖霊によって駆り立てられたように。同じように、サウルは神から逃げ、神に祈ることもなく、自分が神によって助けられると判断してもおらず、神を信頼していませんでした。

ヨハネによる福音書3章。「だれでも水と霊とによって生れなければ、神の国に入ることとはできない」⁽⁸⁶⁾。6章。「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」⁽⁸⁷⁾。同じく。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」⁽⁸⁸⁾。

イザヤ書59章。「主は贖う者として、シオンに来られる。ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると、主は言われる。これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると、主は言われる。あなたの上にあるわたしの霊、あなたの口においたわたしの言葉は、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、あなたの子孫の子孫の口からも、今も、そしてと

こしえに、離れることはない、と主は言われる」⁽⁸⁹⁾。この言葉は教会についてもっとも甘美な記述を含んでいて、教会が何であり、それがどこにあり、神に固有の恩恵が何なのかを教えてください。そうした者たちの集まりが教会であり、これは預言者や使徒によって伝えられた福音を賛美し、そこには聖霊を備えた教会のメンバーによる生活があります。彼らは特別の恩恵、神の言葉、罪の赦し、聖霊、そして永遠の生をもっているのです。

しかし、聖霊は、聞かれ、あるいは認識された福音の声によって作用していることを、わたしたちは知るべきです。ガラテヤの信徒への手紙3章にいわれているように。「わたしたちが、約束された『霊』を信仰によって受けるため」。さらに、神についての認識は神の言葉によって方向づけられねばならず、その言葉のないところに神を求めてはならないことが、しばしばいわれなければなりません。わたしたちが言葉によって方向づけられるときはいつでも、善い行いの三つの原因にぶつかります。それは、神の言葉、聖霊、そして神の言葉に賛同し、これに抵抗することのない人間の意志です。というのも、サウルが自ら自発的に追い払ったように、人間の意志は神の言葉を払い落とすことができるからです。しかし、〔神の言葉を〕聞き入れて自らを保つ精神は、抵抗することも、疑念に陥ることもなく、聖霊の助けによって賛同しようと努力します。この闘争において、意志は決して無為ではないのです。

古人はいいました。先行する恩恵、随伴する意志によって善行が生じる、と。それゆえ、バシレイオスはいいます。「ただ欲しなさい、そこで神はあなたに先んじています」。神はわたしたちより先行していて、わたしたちに呼びかけ、動かし、援助しますが、わたしたちが抵抗するのではないことが、わかります。というのも、罪はわたしたちから生じているのであって、神の意志からではないことが明白だからです。クリュソストムスはいいます。「引き寄せる者、それは意志することを引き寄せる」。ちょうど、ヨハネによる福音書のそうした箇所でも、こう述べられています。「父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る」⁽⁹⁰⁾。彼は、学ぶことを命じています。つまり、言葉を聞き、それに逆らうのではなく、神の言葉に賛同し、疑念に陥らないことを学ぶように、と。

もし真の苦しみ、真の祈りのなかでこれを経験するなら、意志の格闘がどのような種類のものか、明白です。もし、自らがしっかりとした状態であるなら、意志は全く競争することも、格闘ありませんし、聖人のなかには苦悩ありませんでした。しかし、競争が大きくて難しくなると、意志は平穩ではなくなり、弱々しく賛同するようになる

のです。そして、もし約束と模範によって祈りのなかで繰り返し思い起こされ、聖霊によって援助されなければ、絶望へと突入してしまうのです。

わたしは、自分の過ちのゆえにある苦しみにある、数多くの非エピュキリアンを見ました。彼らは、どのように希望を受け取るのか、と議論していました。わたしのなかに新しい光や新しい徳が流れ込んでくるのを感じないのに、と。さらに、もし自由意志が何もしないのなら、そのあいだに、あなたが語る意志が再生が生じるのを感じるまで、疑念とその他の邪悪な情念に耽ろう、と。このマニ教的な空想は酷い嘘であり、わたしたちは、この誤りから精神を引き離し、自由意志はある程度は何かを行うこと (agere aliquid) を教えなければなりません。ファラオ、サウルは強制されたのではなく、意志は自由に神に抵抗したのであり、神の現前を示す明らかな証言がしばしばあるほどです。

そして、物質的でこの世的な精神をもつと呼ばれ、回心をもたらしことはできないという、ある人間の群れがいると捏造するマニ教徒の狂乱も、わたしたちは認めるべきではありません。ちょうど石がイチジクの木に変えられたように、ダビデのなかで回心が生じたのではなく、ダビデのなかでいくらかの自由意志 (aliquid liberum arbitrium) が作用したのです。彼は叱責と約束を聞いたとき、ただちに望んで自由に過ちを告白したのです。そして、彼の意志は、次の声が彼を保ったとき、ある程度のこと (aliquid) を行ったのです。「その主があなたの罪を取り除かれる」⁽⁹¹⁾。そして、この声によって彼が自らを保とうと努力しているとき、ただちに彼は聖霊によって助けられます。次のようにパウロがいうのと同じく。「福音は信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」⁽⁹²⁾。信じる者とは、抵抗しない者、つまり、約束を無視する者ではなく、それに賛同し、そして信じる者のことです。同じく、「福音は聖霊に奉仕する」〔霊に仕える務め〕⁽⁹³⁾。同じく、「約束された『霊』を信仰によって受けるため」⁽⁹⁴⁾。

もし、わたしたちの行為が何もなく、そうした質の注入を期待すべきだとしたら、ちょうど熱狂主義者やマニ教徒のように、福音の務めは必要なくなり、さらに魂における格闘も必要なくなってしまう。しかし、神は声が受け入れられるように、精神が約束を認識し理解するように、わたしたちが疑念に逆らい、同時に聖霊がわたしたちのなかで働くようになるまで、務めとなる仕事 (ministerium) を定めたのです。

したがって、自らの無為を口実とするような者たちは、自由意志は何もしないと考えるがゆえに、わたしは次のように答えます。それどころか、福音の声に従うように、神の子のいうことを聞くように、仲介者を認識するように、という神の命令は永遠であり

不動のものです。人類に神の子という仲介者が送られていることに注視しないとは、これは何という忌まわしい罪なのでしょう。わたしにはできない、と〔わたしは〕います。それどころか、ある程度あなたは〔自由意志によってそれが〕できるのですし、福音の声によってあなたが自身を保つときには、あなたは懇願によって神から助けられていますし、聖霊がそうした慰めのなかで作用していることを知るようになります。神はまさにこうした仕方です。わたしたちが回心するのを望んでいることを知りなさい。呼び覚まされた約束によってわたしたちが自身と格闘するとき、わたしたちは祈り、そして自分たちの疑念と他の邪悪な情念とに立ち向かうのです。それゆえに、若干の古人たちは次のように述べました。人間のなかの自由意志の機能とは、自らを恩恵へと向けること (*applicandi se ad gratiam*) である。つまり、約束を聞いて賛同し、そして努力して、良心に反する罪を放棄することである、と。このようなことは、悪魔には起こりません。したがって、悪魔と人類とのあいだの違いが考慮されます。しかし、これは約束について考察されるとき、より明確になります。というのも、約束は普遍的であり、神のなかには意義を唱える意志など存在しないからです。なぜサウルが拒絶され、ダビデが受け入れられたのか、わたしたちの内に何かそれを区別する原因があるに違いありません。つまり、これら二人のなかには何か違いとなる行為があるに違いないのです。こうした巧みな理解は真実であり、信仰を鍛錬するにおいて (*in exercitiis fidei*) も、真の慰めにおいても必要です。というのも、魂は約束の内に明らかにされた神の子に安らい、このことは、こうしたことの原因、神の言葉、聖霊、そして意志との結び付きを明らかにするだろうからです。

そのうえ、敬虔な者の全人生について語る場合、たとえどれほどわたしたちが無力であろうとも、それにもかかわらず自由意志は若干 (*aliqua*) は残っているものであり、確かにすでに聖霊によって援助されているとき、外的に過失に陥るのを警戒するに際しては、若干 (*aliquid*) 何かをやることのできるのです。ヨセフが姦婦の誘惑に抵抗したとき、次のような原因が集まったのでした。神の言葉と聖霊が精神を動かし、その結果、彼は言葉についてより熱心に考えるようになりました。思考する精神です。もし彼がそのまま悪魔に従っていたら、どれほどの墮落がそれに付き従っていたことでしょう。それは、神からの贈与の喪失、神による永遠の怒り、この世と未来の生における罰、さらに数多くの過失に無数の誘惑です。こうした思考によって動かされた意志は、神の言葉に賛同し、弱る彼を聖霊が元気づけ、それは心のなかの情火を和らげ、神への畏敬

と神に同意する信仰とを呼び起こしました。これは危険に立ち向かい、神からの指揮と善い結果を探し求めます。こうした意志は決して無為のものではなく、自身で誘惑に抵抗し、過りに陥る機会から逃れるように、目と足とに命令したのです。こうした実例が、善い行いの原因を明らかにしています。

ところで、それゆえにこのようにいわれている全てのことは、すなわち聖霊によって援助が増大されることか、あるいはわたしたちの入念さが駆り立てられるようになるためにあるのであって、ちょうどキリストがいう通りなのです。「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」⁽⁹⁵⁾。これは、拒絶する者、無為の者、抵抗する者、恥知らずにもある悪行から他の悪行へと突進する者に対していわれているものではありません。他の箇所では、こういわれています。「だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる」⁽⁹⁶⁾。そして、パウロは神から頂いた恵みを無駄にしてはいけません⁽⁹⁷⁾、と命じるのです。

しばしば何回も、あなたは魂に向かってキリストがいったことを繰り返すのです。「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」。そこで、熱心に考えなさい。ここでどれほどの贈り物をキリストが約束し、どれほど何回も熱心に探し求めることを命じているか、を。「願いなさい」といえば「与えられる」⁽⁹⁸⁾。もしこのように行えば、わたしたちは好い結果を経験します。というのも、信仰は探し求めることへと駆り立てられ、わたしたちが疑念のゆえにより怠惰に冀うことを戒めるからです。しかし、疑念は、わたしたちがこうした命令とこうしたキリストによる約束について考えることを怠るがゆえに、培われるのです。

第四に。わたしたちは、わたしたちの外にある対象や帰結について考えたり嘆いたりしなければなりません。というのも、それについて語ることで、ものごとにおける意志の選択について語ることは別であり、わたしたちはそういうことに用心するのです。というのも、人間には人間の思慮では解決のつかない多くのことが起こります。それは、ただわたしたちから生じてくるだけのものではありません。息子の悪行によって、ダビデが追放に追いやられたように。同じように、人間には思慮において失敗することが多くあるのです。ちょうど、ヨシュアが自らは正しいことをしていると思いつつも、エジプトに対して戦争をしていたように。

こうした危険については、預言のなかで多くのことが熱く語られています。エレミヤ書 10 章にあるように。「主よ、わたしは知っています。人はその道を定めえず、歩みな

がら、足取りを確かめることもできません」⁽⁹⁹⁾。道(via)を彼は召命〔天職〕(vocatio)と理解しています。それについてすべての危険を見通すことは不可能である、と宣言されているのです。そして、結果も成果もわたしたちの力の内にはないことが。エジプトから人々を連れ出すようにモーセは召命されましたが、しかし、全部で40年ものあいだ、見捨てられた荒れた土地にいただけではなく、何度にもわたる放浪をしなければならないとは、決して予見していませんでした。そこには水も穀物もないとは。そして、人々の罪のゆえに、支配に従わないことのゆえに、不穏になるとは。そして、彼は自身の成功が自らの手の内にあったのではなく、神によって導かれたものであることを知ったのです。それゆえにエレミヤは、人間の道はわたしたちの力〔権限〕の内にあるのではない、といいます。つまり、召命はただ人間の意図や、あるいはただ人間の注意深さによって導かれるのではないのです。もし、神が助けてくれなければ、その舵取りは決して幸福なものとはならないのです。

それゆえ洗礼者ヨハネはいいます。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない」⁽¹⁰⁰⁾。エゼキエルは支配の内にあって幸せです。というのも、神によって助けられているからです。アハブは幸せではありません。というのも、神によって助けられてはいないからです。アントニウスは一人で支配することを望みましたが、天からの贈り物は彼にはなく、アウグストゥスに与えられました。こうした言説が意志の自由を無にすることはありません。というのも、これらはわたしたちが予見できるもののなかでの選択と関係するからです。決して、わたしたちの外(extra nos)にある対象や出来事について語られているのではないからです。わたしたちの外にある事柄には、わたしたちの意志がどうこうする前に、他の複数の原因が衝突し合っています。ちょうどポンペイウス一人の意志が勝利の原因ではありえなかったように。

したがって、選択においてある種〔ある程度〕の自由(aliqua libertas)があるとはいえ、それにもかかわらず、やはりこうした妨害についてわたしたちは考慮します。その結果、わたしたちは自身に信頼することをやめ、神からの援助を冀うことを学ぶのです。人間の思慮にとっては解決できない非常に多くのことが、人間には起こります。こうしたことについてヨシャファトの祈りから学びます。歴代誌下、20章。「わたしたちには、攻めて来るこの大軍を迎え撃つ力はなく、何をなすべきか分からず、ただあなたを仰ぐことしかできません」⁽¹⁰¹⁾。それゆえに、キリストはこういいます。「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」⁽¹⁰²⁾。同じく「わたしが父のもとからあなた

がたに遣わそうとしている弁護士、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき」⁽¹⁰³⁾など。神は存在します。そして、解決できないことからわたしたちを救い出し、わたしたちの過ちを正してください。詩編にある通りです。「主を呼ぶ人すべて近くにいまし、まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし」⁽¹⁰⁴⁾。同じく、「主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こしてください」⁽¹⁰⁵⁾。同じく、「あなたの道を主にまかせよ、信頼せよ」⁽¹⁰⁶⁾。

そして、パウロはこういいます。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」⁽¹⁰⁷⁾。こうした助言および慰めは、常にわたしたちの魂に植え付けられなければなりません。あなたは役職にあって、若者たちのあるいは家族の教会を治めています、何かを予見し、これを正しく適度の注意深さをもって管理するのですが、しかし、それそのもののなかでは、もし神があなたを助けてくれるならば、善い成果が付随してくるということを知りなさい。こういわれている通りです。「主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の苦労はむなし」⁽¹⁰⁸⁾。この他にさらに多くの予期せざる危険が生じますが、これをあなたは追い散らすことはできません。これは神によって粉碎されることをあなたは祈るしかないので。ある過ちに陥って、これから正しくされることをあなたは祈ります。ちょうど神が奇跡的な仕方でもヨナの過ちを直してくださったように。わたしたちの自由に対するこうした妨害を、わたしたちは毎日経験しています。

しかし、こうした問題については、人間の多くは規律なしの、あたかも酔ったような部分から、細心の注意もなく、ある信仰の鍛錬や祈りもなしに生きているのであって、こうしたところに混乱した判断が生じるのです。このような人々が、どのように行動の程度や対象の違いを区別をしたりできるというのでしょうか。

パウロは、功名心や貪欲によって、知ったかぶりをして墮落した教えを引き入れることはありません。こうしたことは、ある程度は彼の力の内にあります。しかし、召命が実り豊かで効果的であるように、神のみがそこいます。つまり、これは神からの贈与なのです。彼が無知や過ちによって墮落した教えや他の悪徳に絡め取られることがないのは。それゆえに、彼は神から支配され援助されるように、自らに大きな保護を祈るのです。

今や聖書外典が語ることにについて述べましょう。「神は人間をそれ自らの思慮の手の内に放置する〔主が初めに人間を造られたとき、自分で判断する力をお与えになっ

た)」⁽¹⁰⁹⁾。これは、ある程度の慎み深さとともに理解されるなら、もっとも素晴らしい賞賛です。確かに今やこの無力で当てにならない本性においては、自由を妨げる多くのものがあります。

第一に自然本性の墮落。これによって神についての知はわたしたちの精神のなかで曖昧なものとなり、意志と心とは神から逸脱し、神に対する鋭敏な畏れ感覚も失い、神に対する信頼と愛も燃え上がることなく、多くの墮落した情動に捉えられてしまっています。

第二の妨げは悪魔です。これはぞっとするような憎悪によってキリストの好機に障害をもたらし、これによって人間をさまざまな罫や罪に陥れ、情欲の火が燃え盛るのを促すのです。ちょうど、カイン、サウル、ユダなどのように。

第三の妨げはこの世の生における、まさに骨の折れる問題や危険といった混沌の巨大な塊です。こうしたなかで、わたしたちは毎日、人間の思惑を超えて、多くの予見できない解決できないことにさらされるのです。ちょうどダビデが息子の反乱を予見しなかったように。一般には、こういわれています。夜遅く、何を運んでくるか、あなたには分からない〔夜中に何が起こるか分からない〕。

したがって、この本性の墮落のなかで自由を妨げるものはたくさんあるのであって、それを賞賛する発言、「自分で判断する力をお与えになった」は、何らかの解釈を抜きにして受け取られるべきではありません。確かにこうした自由の賞賛は、損なわれていない本性については真実です。そのとき人間はそれ自らの思慮の手の内に、つまり、自由を妨げることのないなかで、本性の暗闇もない、悪魔による邪悪もない、問題の大波もないなかで、ことを正しく遂行する選択と機能は最高に自由であったことでしょう。今では、神の律法に一致する内的な情動が無力ななかで、聖霊を抜きにしては、これは駆り立てられません。それどころか、すでに述べたように、さらに外的な規律〔秩序ある生き方や習慣〕(*disciplina externa*)はしばしば妨害されます。それゆえに、もしだれかが聖書外典の述べることを、今の本性について受け入れるべきだと努力するならば、多くの制限が加えられることが必要となるでしょう。すなわち、神は人間をそれ自らの思慮の手の内に放置するとは、つまり、人間は自ら悪へと突進する可能性があり、聖霊の助けによって正しく行動することができるということ、というように。というのも、このとき意志は無為ではなく、彫像のように自らをもっていない〔ただじっとしている〕というわけではないからです。ヨセフが自分自身と格闘したように、彫像におけ

のと同じようにして、自身のなかに靈的な情動が刻印されるということはないのです。これに反して、聖霊によって助けられた意志にはもっと自由が生じるのであり、つまり、慎重かつ安定して働くのであって、神を熱烈に礼拝するのです。

最後に、ここでヒエロニムスのいう二つのこと〔なぜ律法が与えられているのか〕が述べられなければなりません。これはしばしば引用されるもので、しかも解釈を必要とします。一方はこれです。もし、だれかが神は不可能なことを命令するというならば、この者は呪われるべき者〔破門〕である。これがいわれた状況がどのようなものでも、これを引き合いに出し押し付ける者にとっては、なぜ神の律法があるのか、その理由を知らないことを明らかにしているというのは確かです。国家の知恵は法が実行されるために与えられていると判断しています。それに対して、神の律法はとりわけ罪に対する神の判断を明らかにするため、という理由によって与えられています。神はその怒りに気づかれることを望んでおり、律法の声によってわたしたちにその罪を明らかにしているのです。心のすべてにおいて神を愛することは正しいことです。したがって、わたしたちはそういうふうではないので、律法がわたしたちを裁き咎め、わたしたちに怒りを示すのです。次いでもうひとつの理由は、こうです。それはすでに仲介者を知り和解した者のなかで神の律法が活動を始め、この者たちのなかで神の援助が開始されるためです。

したがって、律法は不可能である、というこの声を聞くとき、わたしたちは国家の知恵に相談するべきでも、外的な規律について考えるべきでもありません。パウロは律法を通じて神の怒りが取り除かれることを否定し、こうした弱い本性において律法が満たされることを否定するのです。

同じく、ローマの信徒への手紙3章。「律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされない」⁽¹¹⁰⁾。ここでは行いがなされることは認められています。というのも、それは外的な行いを問題にしているので、律法は可能となります。しかし、彼はこうした行いのゆえに人間が正しくある〔義である〕とか、律法が満たされるとかいうことは、否定するのです。というのも、律法は罪や神の怒りを取り除くことはなく、あるいは精神における暗闇や、意志や心において神から逸脱するのを取り除くこともないからです。

したがって、たとえ社会の人々が、神の律法は不可能であるといわれて、気を害するにしても、それにもかかわらず、こうした人間の墮落した本性についてそれはいわれているのであって、それは真実なのです。そして、教会は人間の内的な罪を判断する神の

律法と、ただ外的な規律について語る人間の法との区別について注視することを教える必要があります。さらに、キリストの恩恵の大きさが認識されるよう、教える必要もあります。これは、律法が取り除くことのない罪を取り除くからです。それゆえに、彼は仲介者なのであり、彼によってわたしたちは正しい者となるのです。律法によってわたしたちは正しくなるのではないのですから。それゆえに、彼はわたしたちに聖霊を与え、その結果これほどの弱さにもかかわらず、律法は開始させられ、何らかの有益なことをわたしたちや他の者たちになし、人類全体に止まる悪魔が妨げられることになるわけです。

ところで、ヒエロニムスのいうもう一方について考察しましょう。もし、だれかが恩恵なしに律法の行いがなされるというならば、この者は呪われるべき者〔破門〕である。もちろん、この言説の簡潔さは説明を要します。というのも、恩恵は、ただ聖霊の助けをめぐって理解されるだけではなく、キリストのゆえに生じる、わたしたちに帰せられた恩恵、ならびに聖霊による援助と理解されるからです。なぜなら、第一に行いによって、キリストの認識とキリストにおける信仰が、輝きで勝らなければならないからです。

ゆえに、恩恵は次のように理解されます。律法は恩恵を通じてなされる。つまり、キリストを通じた信仰によってわたしたちは受け入れられて、キリストの一員にされるからです。このとき、ちょうど申し分なく律法をなすかのように、すでにわたしたちは神に気に入られているというのは確かです。このようにして罪が圧倒され、わたしたちのような不相応な者が受け入れられるというのは、巨大な善意なのです。

次いで、さらに恩恵は援助によって理解されます。これはさまざまな形で必要となります。精神は真実の光によって点火されなければなりませんし、神の言葉の内にしっかりと止まらなければなりません。心において信仰の情動が発火させられ、そして精神が、わたしたちあるいは他の人々のために有益なことを尊重するように、動かされます。ちょうどダビデは、自身のある人間的な思慮によって人々の数について考えたとき、破壊へと動かされました⁽¹¹¹⁾。したがって、常にわたしたちは神にとって喜ばれ、しかもわたしたちや教会にとって有益なことをなすように、と祈るのです。それどころか、いずれもわたしたちに対する神の援助と指導がなければ、これらはなされえないのです。しかし、わたしたちが祈るとき、わたしたちとともにおり、援助をもたらすのが神の意志であることは確かであり、それはキリストが明らかにいう通りなのです。「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」⁽¹¹²⁾。

もし、これらのことが人生において経験されるなら、教えはもっと明瞭に理解されます。

しかし、小数の者しか援助を求めませんし、それどころかいわば絶望によって神から逃亡する者は人間による思慮を求めます。それゆえに、キリストによるこうした約束と恩恵を認識するに至らないのです。ですから、わたしたちはこうした怠惰や疑いを振り払い、わたしたちの悲惨や危険の巨大さを認識して、わたしたちを真の祈りへと駆り立てるのです。こうしたなかで、わたしたちは神の約束が真実であることを感じるのです。ちょうど、こういわれているように。「求めなさい。そうすれば、与えられる」⁽¹¹³⁾。同じく、「主を呼ぶ人すべてに近くいまし、まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし」⁽¹¹⁴⁾。

さて、ヒエロニムスの言葉には二つの理解があります。律法は恩恵によって生じる。つまり、キリストによる帰罪と聖霊による援助によって、確かにまだ始まったばかりの服従で、律法の完成からは今なお遠いところにいて相応しくないのにもかかわらず、わたしたちはキリストのゆえに喜ばれます。このようにも理解されます。律法は信仰によって確立される⁽¹¹⁵⁾。最初の帰罪、キリストによってわたしたちは和解を受け取るのであって、それなしには律法はただの断罪の声でしかありません。次いで、信仰によって聖霊が受け取られて服従が始まり、キリストのゆえに神に喜ばれるということです。

注

- (1) ヘブライ人への手紙、11:1。
- (2) マルコによる福音書、13:31、ルカによる福音書、21:33。
- (3) アルケシラオス (Arcesilaus, 前 315-241) は、懐疑学派の始祖。学習の独断的な理論に反対した。
- (4) エフェソの信徒への手紙、4:11。
- (5) エフェソの信徒への手紙、4:14。
- (6) 男性生殖力の神。
- (7) A. v. Harnack: Marcion, 2. Aufl. 1924
- (8) メランヒトン は歴史によることなしに比較している。
- (9) Albert Pighius (Pigghe) (1490 頃 -1542) オランダ人のカトリック神学者、数学者、天文学者。
- (10) より純粋な教会とは、イエスの時代に近く存在していた古代教会と理解されている。
- (11) フィリピの信徒への手紙、2:13。
- (12) マタイによる福音書、17:5。
- (13) ヨハネによる福音書、1:3。「万物は言によって成った」。
- (14) 詩編、33:6。
- (15) 詩編、33:9。
- (16) ルクレティウス『物の本質について』（樋口勝彦訳、岩波文庫、1961 年）、216 頁以下参照。

- (17) デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝(下)』(加来彰俊訳, 岩波文庫, 1994年), 262頁以下参照。
- (18) マタイによる福音書, 21:21。
- (19) 詩編, 55:23。
- (20) 使徒言行録, 17:28。
- (21) ヘブライ人への手紙, 1:3。
- (22) コロサイ人への手紙, 1:17。
- (23) テモテへの手紙一, 6:13。
- (24) テモテへの手紙一, 4:10。
- (25) テモテへの手紙一, 6:17。
- (26) マタイによる福音書, 10:29-30。
- (27) 詩編, 104:27-30。
- (28) 詩編, 145:15-16。
- (29) 詩編, 33:13, 15。
- (30) 詩編, 147:8-9。
- (31) 詩編, 36:7。
- (32) 詩編, 33:18-19。
- (33) 詩編, 34:10。
- (34) 詩編, 37:19。
- (35) ホセア書, 2:10-11。
- (36) 申命記, 28:11。
- (37) 申命記, 28:23。
- (38) 申命記, 30:20。
- (39) 箴言, 3:33。
- (40) 箴言, 10:22。
- (41) 詩編, 127:1。
- (42) 詩編, 100:3。
- (43) 詩編, 50:15。
- (44) 詩編, 37:5。
- (45) ローマの信徒への手紙, 1:20。
- (46) 使徒言行録, 17:27f。
- (47) 創世記, 1:31。
- (48) 詩編, 5:5。
- (49) ヨハネによる福音書, 8:44。

- (50) ゼカリヤ書, 8:17。
- (51) ヨハネの手紙一, 2:16。
- (52) ヨハネの手紙一, 3:8。
- (53) ローマの信徒への手紙, 5:12。
- (54) 出エジプト記, 7:3。
- (55) テモテへの手紙一, 1:9。
- (56) ガラテヤの信徒への手紙, 3:24。
- (57) エレミヤ書, 10:23。
- (58) 列王記下, 23:29。
- (59) オクタヴィアヌス宛てキケロー書簡, 6:1。
- (60) オウィディウス『黒海からの手紙』(木村健治訳, 京都大学学術出版会, 1998 年), 400 頁。
- (61) マタイによる福音書, 10:20。
- (62) ヨハネによる福音書, 14:18。
- (63) フィリピの信徒への手紙, 2:13。
- (64) ルカによる福音書, 11:13。
- (65) 詩編, 37:23。
- (66) ヨハネによる福音書, 15:5。
- (67) ヨハネによる福音書, 3:27。
- (68) ヨハネによる福音書, 15:5。
- (69) エフェソの信徒への手紙, 1:11。
- (70) コリントの信徒への手紙一, 12:6。
- (71) 詩編, 25:5。
- (72) 『国家』, 2:380B。
- (73) 詩編, 145:18。
- (74) 申命記, 6:5。
- (75) テモテへの手紙 1, 1:9。
- (76) ガラテヤの信徒への手紙, 3:24。
- (77) オウィディウス『変身物語 (上)』(中村善也訳, 岩波文庫, 1981 年), 260 頁。
- (78) エフェソの信徒への手紙, 2:2。
- (79) サムエル記上, 16:14。ヨハネによる福音書, 13:27。
- (80) 申命記, 6:5。
- (81) ゼカリヤ書, 12:10。
- (82) ルカによる福音書, 11:13。
- (83) ローマの信徒への手紙, 8:14。

- (84) ローマの信徒への手紙, 8:9。
- (85) コリントの信徒への手紙一, 2:14。
- (86) ヨハネによる福音書, 3:5。
- (87) ヨハネによる福音書, 6:44。
- (88) ヨハネによる福音書, 15:5。
- (89) イザヤ書, 59:20, 21。
- (90) ヨハネによる福音書, 6:45。
- (91) サムエル記下, 12:13。
- (92) ローマの信徒への手紙, 1:16。
- (93) コリントの信徒への手紙2, 3:8。
- (94) ガラテヤの信徒への手紙, 3:14。
- (95) ルカによる福音書, 11:13。
- (96) マタイによる福音書, 25:29。
- (97) コリントの信徒への手紙2, 6:1。
- (98) ヨハネによる福音書, 16:24。
- (99) エレミヤ書, 10:23。
- (100) ヨハネによる福音書, 3:27。
- (101) 歴代誌下, 20:12。
- (102) ヨハネによる福音書, 14:18。
- (103) ヨハネによる福音書, 15:26。
- (104) 詩編, 145:18。
- (105) 詩編, 145:14。
- (106) 詩編, 37:5。
- (107) フィリピの信徒への手紙, 2:13。
- (108) 詩編, 127:1。
- (109) シラ書〔集会の書〕, 15:14。
- (110) ローマの信徒への手紙, 3:20。
- (111) 歴代誌上, 21:1。
- (112) ルカによる福音書, 11:13。
- (113) マタイによる福音書, 7:7。
- (114) 詩編, 145:18。
- (115) ローマの信徒への手紙, 3:31。